observe it
people audit

ObserveIT v5.6
評価ガイド

（Windows エージェント篇）

Rev. 1.1

2012.07.23

ジュピターテクノロジー

1 はじめに 1
1.1 ObserveITとは？ 1
1.2 ObserveITコンポーネント 1
1.2.1 ObserveITエージェント 1
1.2.2 ObserveITアプリケーションサーバー 2
1.2.3 ObserveIT Web管理コンソール 3
1.2.4 ObserveITデータベースサーバー 3
1.3 アーキテクチャ例 3
1.4 展開シナリオ 4
1.4.1 標準エージェントベースの展開（サーバー & デスクトップ） 4
1.4.2 ジャンプサーバーゲートウェイ展開 5
1.4.3 ハイブリッド展開 ： エージェントベース ＋ ゲートウェイ 5
2 システム要件 7
2.1.1 ObserveITエージェントのシステム要件 7
2.1.1.1 Windowsエージェントのシステム要件 7
2.1.1.2 Unixエージェントのシステム要件 8
2.1.1.3 Linuxエージェントのシステム要件 8
2.1.2 ObserveITサーバーコンポーネントのシステム要件 9
3 インストレーション 11
3.1 ソフトウェアの入手 11
3.2 評価ライセンスの入手 13
3.3 Microsoft Internet Information Services(IIS)の設定 14
3.3.1 Windows Server 2003 へのIIS 6.0 インストール 14
3.3.2 Windows Server 2008/R2 での IIS 7.Xインストール 16
3.3.3 Webサイトの作成およびリスンポートの変更 21
3.4 SQL Serverの設定 21
3.5 ObserveITインストレーション 27
3.6 ObserveITエージェントのインストール 32
3.6.1 Windowsエージェントのインストール 32
4 ObserveITクイックツアー 35
4.1 ユーザーセッションを記録する 35
4.2 ObserveIT Web管理コンソールにログインする 36
4.3 記録済みセッション（アクティビティ）を検索する 39
4.3.1 サーバーを指定してセッション（アクティビティ）を見つける 39
4.3.2 ログインユーザーを指定してセッション（アクティビティ）を見つける 40

4.3.3 フリーテキスト検索機能を使用してセッション（アクティビティ）を見つける 42
4.4 記録済みセッション（アクティビティ）を再生する 43
4.5 レポートを使用する 46
4.5.1 レポートを表示する 46
4.5.2 カスタムレポートを作成する 48
4.5.3 レポートをスケジュール送信する 52
5 ObserveITのその他の機能 56
5.1 コンソールユーザー 56
5.2 識別 56
5.3 サーバーポリシー 58
5.4 セキュリティ実装 59
5.4.1 イメージセキュリティの有効化 60
5.4.2 インストールセキュリティの有効化 60
5.4.3 セッション再生プライバシーの有効化 61
5.4.4 トラフィックセキュリティの有効化 61
5.5 アラートとイベント 62
5.5.1 アラート管理 62
5.5.2 イベント管理 62
5.5.3 アラーム設定の構成 63
5.6 身元情報の盗難検知（なりすまし犯罪の発見） 63
5.7 メッセージ 64
5.8 監視ログ 64
5.9 LDAP設定 65
5.10 アーカイブ 66
5.11 保存セッション 67
5.12 ObserveIT Web管理コンソールへのアクセス監査 67
5.12.1 ログイン監査 67
5.12.2 セッション監査 68
5.12.3 保存セッション監査 68
6 ObserveITのアンインストール 70
6.1 ObserveIT Webコンポーネントのアンインストール 70
6.2 ObserveITデータベースの削除 72
6.3 ObserveITエージェントのアンインストール 73
6.3.1 Windowsエージェントのアンインストール 73
7 お問い合わせ 74

ObserveIT は ObserveIT 社の登録商標です。
その他の社名および製品名は、それぞれの会社の商標または登録商標です。

変更履歴

版	発行日	変更内容
第 1.1 版	2012/07/23	新規作成 （ObserveIT version 5.6）

1 はじめに

この資料は、ユーザーアクティビティのモニタリングを行う ObserveIT 評価ガイドです。はじめて ObserveIT を評価いただく方を対象に、ObserveIT の概要、インストレーション、基本的な使い方、主要な設定を紹介します。

注記:

- この資料は、ObserveIT の評価を目的とするものです。このため、本番環境でのご利用には適さない場合がございますので、あらかじめご了承ください。本番運用に適したインストレーションおよび構成については、弊社までお問い合わせください。
- 本篇は Windows エージェントの評価用です。Unix/Linux エージェントの評価ガイドは「評価ガイド Unix/Linux 篇」をご参照ください。
- ObserveIT には、無料で無期限に使用いただける Xpress 版（構成変更不可、機能制限あり）と、有償の正規版があります。この資料は、正規版の評価を目的としたものです。Xpress 版と正規版の機能比較については、『ObserveIT 製品マニュアル』をご参照ください。

1.1 ObserveITとは？

ObserveIT はサーバーの監視カメラのようにユーザーの行動を監視します。

- ユーザーが行うすべてのアクションをビデオとテキストで記録します。
- 難解なシステムログファイルを読み取る必要は無くなります。
- 「どうしてネットワークでこの変化が起こったのか？」を推測することも無くなります。

ObserveIT を使えばユーザーが何をしていたかがはっきりわかります！

1.2 ObserveITコンポーネント

ObserveIT は以下の4つのコンポーネントから構成されます。

- ObserveITエージェント
- ObserveITアプリケーションサーバー
- ObserveIT Web管理コンソール
- ObserveITデータベースサーバー

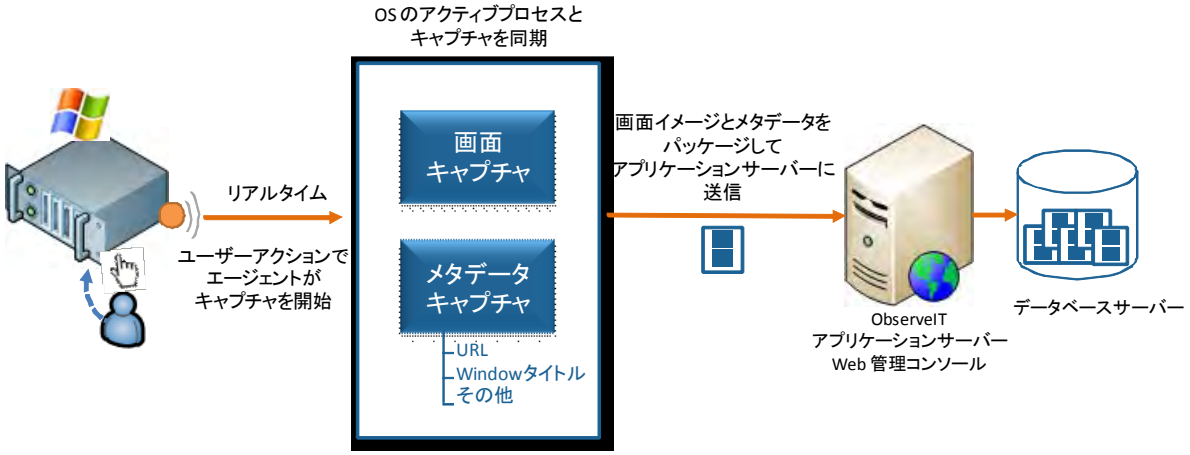
1.2.1 ObserveITエージェント

ObserveIT エージェントは、監視対象のサーバー/ワークステーションごとにインストールが必要なコンポーネントです。ObserveIT エージェントは、ユーザーアクションのたびに、スクリーンショットと

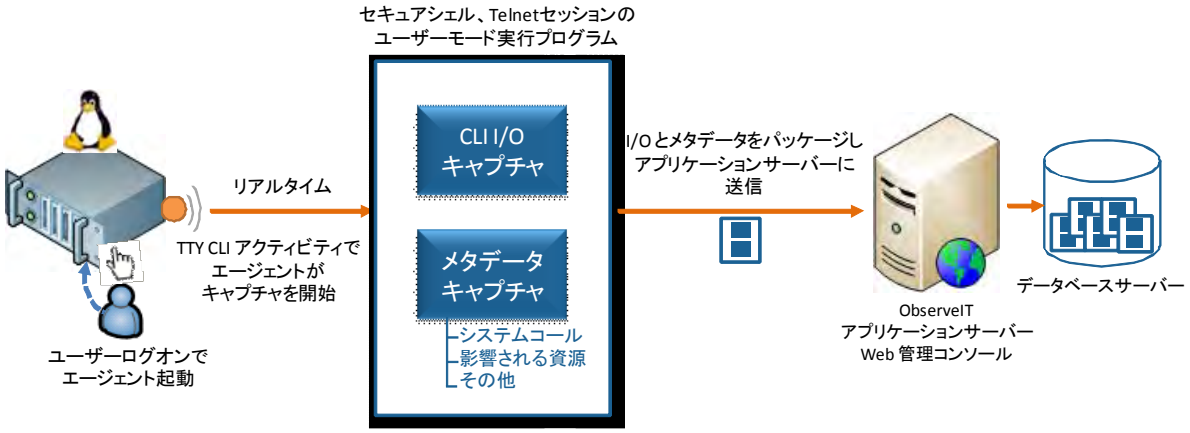
メタデータをキャプチャします。メタデータとは、エージェントによって抽出された OS の状態や使用されたアプリケーションプログラムに関する情報のことです。これにより、監査者はユーザーが何を行ったのかを正確に把握することができます。

注記: 初期設定では、ObserveIT エージェントは ObserveIT アプリケーションサーバーとの通信に TCP 4884 ポートを使用します。このポート番号は必要に応じて変更することができます。また、ObserveIT エージェントと ObserveIT アプリケーションサーバー間の通信に、SSL を使用するように構成することもできます。

Windowsエージェントの動作イメージ



Unix/Linuxエージェントの動作イメージ



1.2.2 ObserveITアプリケーションサーバー

ObserveIT アプリケーションサーバーは、Microsoft Internet Information Server（IIS）のコンテキスト内で起動する ASP.NET アプリケーションです。ObserveIT エージェントによって送信されたデータを受け取って処理し、保存とインデックス付けを行うために ObserveIT データベースサーバーにデータを送信します。さらに、ObserveIT アプリケーションサーバーは定期的に設定情報をエージェントに提供します。

注記：この資料では、ObserveIT アプリケーションサーバーと ObserveIT Web 管理コンソールをあわせて、“ObserveIT 管理サーバー” と記載することがあります。

1.2.3 ObserveIT Web管理コンソール

ObserveIT Web 管理コンソールも Microsoft Internet Information Server（IIS）のコンテキスト内で起動する ASP.NET アプリケーションです。これは ObserveIT ユーザーが ObserveIT データにアクセスしたり ObserveIT を構成、管理したりするために使用する主要インターフェイスです。

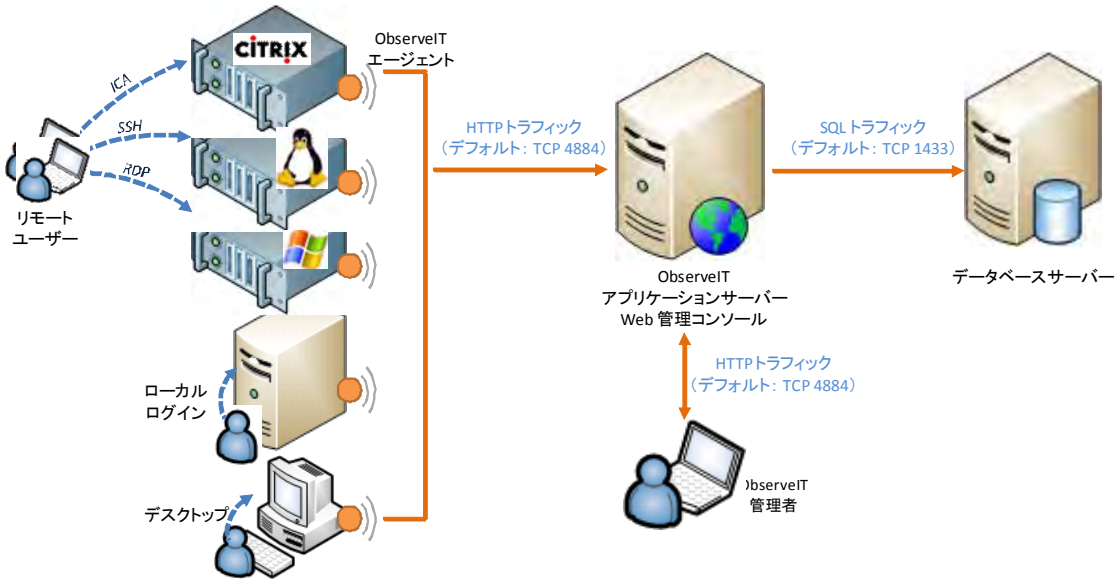
注記：この資料では、ObserveIT アプリケーションサーバーと ObserveIT Web 管理コンソールをあわせて、“ObserveIT 管理サーバー” と記載することがあります。

1.2.4 ObserveITデータベースサーバー

ObserveIT データベースサーバーは、2つの Microsoft SQL Server データベースからなるデータベースサーバーです。これらのデータベースはインストール処理中に自動で作成されます。ObserveIT データベースは、すべての設定データと ObserveIT エージェントがキャプチャしたすべてのメタデータを保存します。ObserveIT アプリケーションサーバーと ObserveIT Web 管理コンソールが SQL Server（TCP1433 ポート）と標準的なデータベース接続を確立します。

1.3 アーキテクチャ例

サーバーサイドコンポーネント（ObserveIT アプリケーションサーバー、ObserveIT Web 管理コンソール、ObserveIT データベースサーバー）は、単一のプラットフォームまたは複数のプラットフォームにインストールできます。以下の図は、基本的なアーキテクチャイメージです。



Step 1. 監視対象のデスクトップまたはサーバーで ObserveIT エージェントが起動します。

Step 2. ObserveIT エージェントがユーザーアクティビティに関する情報をキャプチャ保護し、ObserveIT アプリケーションサーバーに送信します。

Step 3. ObserveIT アプリケーションサーバーがデータを分析し、データを ObserveIT データベースサーバーに保存します。

Step 4. ObserveIT 管理者が ObserveIT Web 管理コンソールにアクセスし、キャプチャされたユーザーアクティビティを検索したりレポート生成したりします。

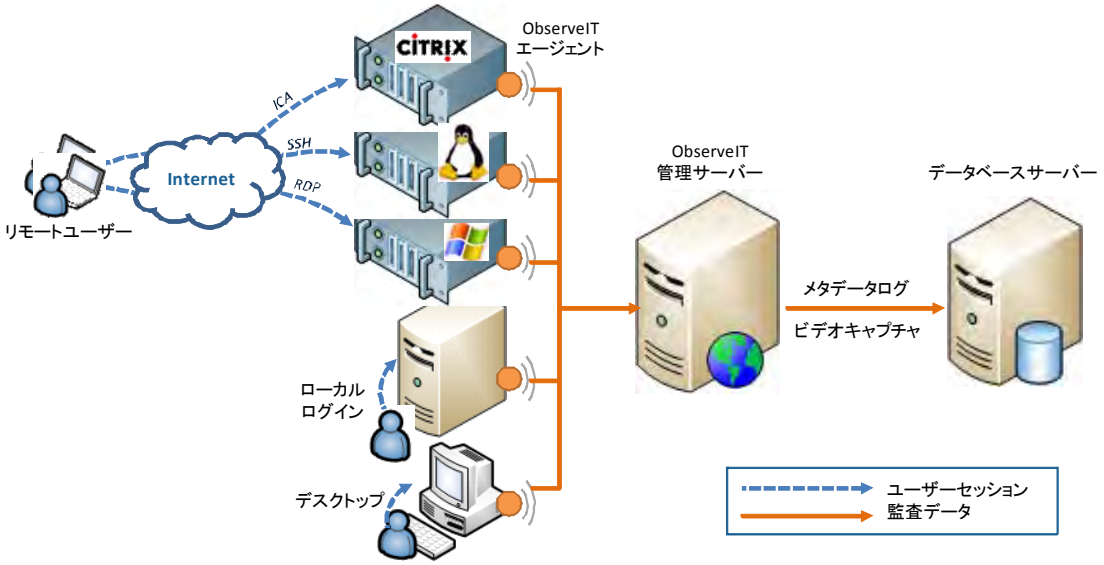
1.4 展開シナリオ

ここでは、代表的な ObserveIT 展開シナリオを3つ紹介します。

- 標準エージェントベースの展開（サーバー ＆ デスクトップ）
- ジャンプサーバーゲートウェイ展開
- ハイブリッド展開 ： エージェントベース ＋ ゲートウェイ

1.4.1 標準エージェントベースの展開（サーバー ＆ デスクトップ）

この展開シナリオでは、監視対象の各サーバーに ObserveIT エージェントをインストールします。



メリット:

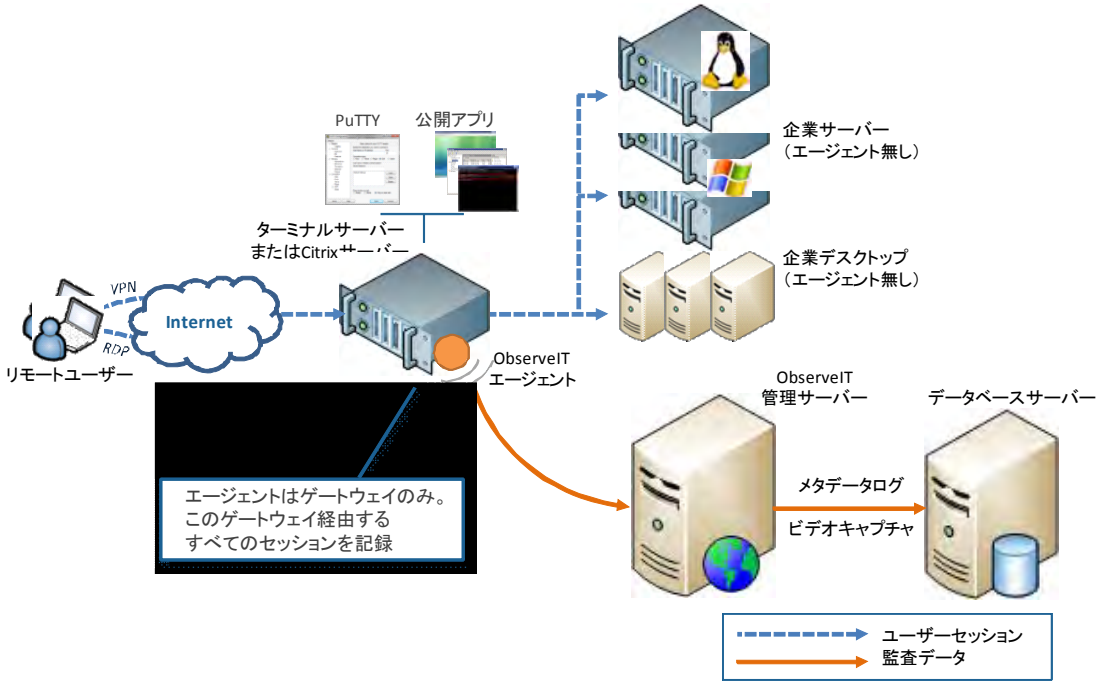
- アクセス方法に依存しない： 直接アクセスもリモートアクセスも同様に記録できる。
- アプリケーションの種類に依存しない： VMware，共有アプリなどすべてのアプリケーションを記録できる。
- 低レベルの OS 情報（ウィンドウタイトル、システムコールなど）を含む詳細なメタデータを取得できる。

デメリット:

- 各サーバーにエージェントが必要。

1.4.2 ジャンプサーバーゲートウェイ展開

常にゲートウェイサーバーを経由してサーバーにアクセスする環境では、ゲートウェイサーバーのみに ObserveIT エージェントをインストールし、ゲートウェイサーバーを経由するすべてのユーザーアクションを記録することができます。



メリット:

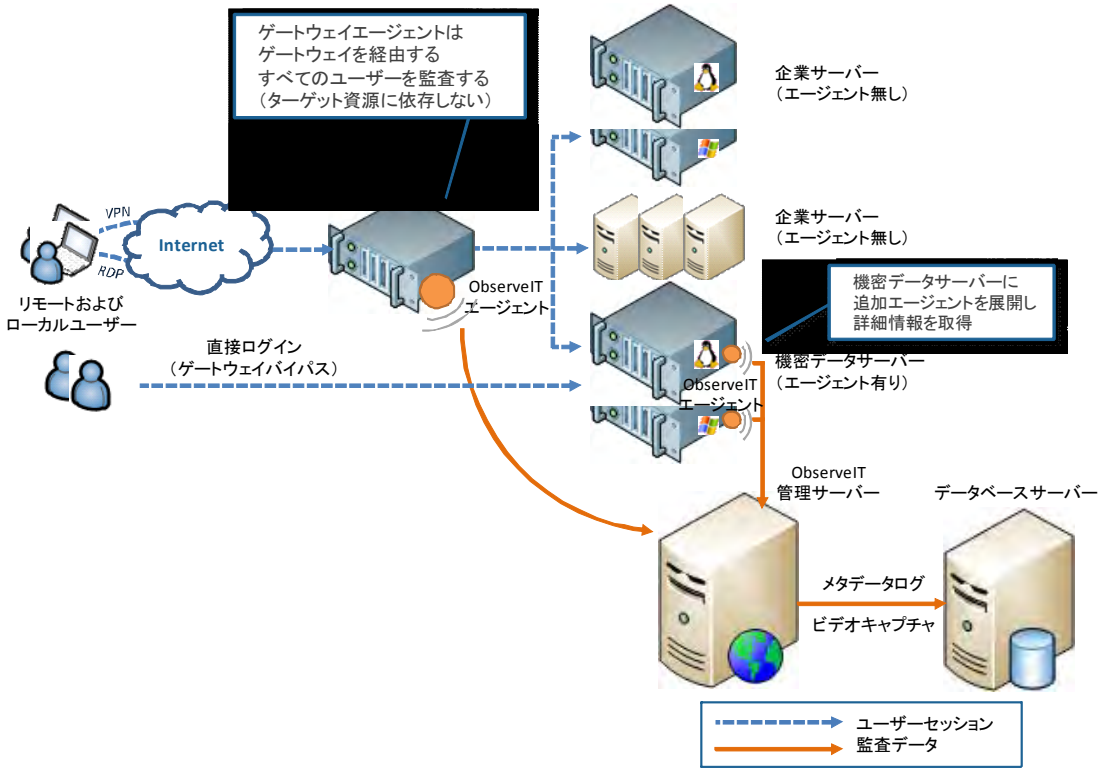
- ゲートウェイ 1 箇所ですばやく展開できる。
- ゲートウェイを経由するセッションのすべてのネットワークリソースに対するアクセスをカバーできる。

デメリット:

- サーバーへ直接アクセスするユーザーの行動（例： ローカルコンソールログイン、RDP/SSH などによる直接アクセス）を記録できない。
- 標準的なエージェントベースの展開に比べて、取得できるテキストメタデータが限定的である（例： ゲートウェイのエージェントは RDP 画面で開かれたファイル名はわからない）。

1.4.3 ハイブリッド展開 ： エージェントベース ＋ ゲートウェイ

標準エージェントベースの展開とゲートウェイ展開を組み合わせた展開です。



メリット:

- 標準エージェントベースの展開とゲートウェイ展開の両方のメリットがある。
- ネットワークリソースに関係なく、ゲートウェイを経由するユーザーのすべてのアクションを記録できる。
- より厳密な監査が必要な機密リソースについては、エージェントをインストールすることでより多くのメタデータを取得でき、あらゆるアクセス方法（直接およびゲートウェイ経由でのアクセス）に対処できる。

2 システム要件

この章では、各 ObserveIT コンポーネントの最小システム要件について説明します。

- ObserveITエージェントのシステム要件
- ObserveITサーバーコンポーネントのシステム要件

注記: 3つのサーバーサイドコンポーネント(ObserveIT アプリケーションサーバー、ObserveIT Web 管理コンソール、ObserveIT データベース)は、組織のニーズと性能に関する判断によって、それぞれ単一プラットフォームまたは複数プラットフォームにインストールできます。実際の推奨リソースは、配備するエージェントの数、各エージェントでのアクティビティの量、データベースで保持する履歴データの量によって決まります。

2.1.1 ObserveITエージェントのシステム要件

以下の内容を含みます。

- Windowsエージェントのシステム要件
- Unixエージェントのシステム要件
- Linuxエージェントのシステム要件

2.1.1.1 Windowsエージェントのシステム要件

Windows エージェントの最小システム要件は以下の通りです。

システム	要件
OS	Microsoft Windows Server 2000/2003/2003 R2/2008/2008 R2, Windows 2000 Pro, Windows XP Pro, Windows Vista, Windows 7 **注記:** • OS に最新のサービスパックを適用することを推奨します。 • 32-bit および 64-bit バージョンがサポートされます。
.NET Framework	version 2.0 以降
CPU	2.4 GHz 以上 (Intel または AMD プロセッサ)
メモリ	1 GB 以上
HDD	最低 100 MB
ネットワークカード	10/100 Ethernet アダプタ (Gigabit 推奨)

2.1.1.2 Unixエージェントのシステム要件

Unix エージェントの最小システム要件は以下の通りです。

システム	要件
OS	Solaris 10 update 4 から update 10; x86/x64 または Sparc 、AIX 5.3
CPU	Intel アーキテクチャの場合： 2.4 GHz 以上（Intel または AMD プロセッサ） Sparc アーキテクチャの場合： UltraSparc II 400MHZ 以降 AIX アーキテクチャの場合： 1.3 GHz 以上（Power4 processors 以上）
メモリ	1 GB 以上
HDD	最低 100 MB
ネットワークカード	10/100 Ethernet アダプタ（Gigabit 推奨）

注記：

- Whole Root Zone – ObserveIT でサポートされます。ObserveIT Solaris エージェントを各 zone にインストールする必要があります。
- Sparse Root Zone – ObserveIT でサポートされません。

2.1.1.3 Linuxエージェントのシステム要件

Linux エージェントの最小システム要件は以下の通りです。

システム	要件
OS	RHEL / CentOS 5.0-5.7, RHEL / CentOS 6.0-6.2, i386/x86_64 Ubuntu 10.04
CPU	2.4 GHz 以上（Intel または AMD プロセッサ）
メモリ	1 GB 以上
HDD	最低 100 MB
ネットワークカード	10/100 Ethernet アダプタ（Gigabit 推奨）

注記：

- ObserveIT RHEL/CentOS エージェントのインストール前に、Libuuid, Libxml2, and OpenSSL が先にインストールする必要があります。

2.1.2 ObserveITサーバーコンポーネントのシステム要件

ObserveIT サーバーコンポーネント(アプリケーションサーバー、Web 管理コンソール、データベースサーバー)の最小システム要件は以下の通りです。

システム	要件		
	アプリケーション サーバー	Web 管理コンソール	データベースサーバー
OS	Microsoft Windows Server 2003/2003 R2/2008/2008 R2 **注記:** • OS に最新のサービスパックを適用することを推奨します。 • 32-bit および 64-bit バージョンがサポートされます。		
.NET Framework	version 2.0 以降		
Web サーバー	Microsoft Internet Information Server (IIS) version 5.0 以上(バージョンは、利用中の Windows Server のバージョンに依存) ASP .NET 必須		
CPU	3.2 GHz 以上 (Intel または AMD プロセッサ)	2 GHz 以上 (Intel または AMD プロセッサ)	3.2 GHz 以上 (Intel または AMD プロセッサ)
	注記: 高速な最新の CPU、できればデュアルコア以上をご使用いただくことを強くお勧めします。		
メモリ	2 GB 以上(推奨: 4GB)	1 GB 以上	4 GB 以上(推奨: 8 GB および 64-bit OS アーキテクチャ)
HDD	最低 1 GB	最低 1 GB	エージェントアクティビティ1時間につき 60 MB を消費
ネットワークカード	10/100 Ethernet アダプタ (Gigabit 推奨)		
SQL Server			SQL Server 2005/2008/ 2008 R2(最新のサービスパック適用)

注記:

- ほとんどの導入では、ObserveIT アプリケーションサーバーと ObserveIT Web 管理コンソールは同一のハードウェアプラットフォーム上で起動します。
- ObserveIT アプリケーションサーバーは、他の IIS Web サービスと共存できます。
- ObserveIT データベースサーバーを同一コンピューターにインストールする場合は、追加のストレージとプロセッサが必要になる可能性があります。
- SQL Server Expres にはデータベースサイズに上限がある(SQL Server 2005 Express の場合は 4 GB、SQL Server 2008 R2 Express の場合は 10 GB)など機能に制限があるため、SQL Server のフル機能版をご使用いただくことを強くお勧めします。

- ObserveIT のアーカイブ機能を使用する場合は、想定されるアーカイブデータの少なくとも2倍以上の空きディスク容量があることをご確認ください。
- ObserveIT データベースを SQL Server 2005 Express 版を起動しているスタンドアロンサーバー上にインストールする場合は、SQL Server 構成マネージャーで以下のアクションを実行して下さい。
    - TCP/IP プロトコルの有効化
    - SQL Server Browser サービスの開始
- SQL Server では、Windows 認証ではなく混合認証をご利用いただくことをお勧めします。
- この最小システム要件は、各バージョンにより異なるので、各バージョンのリリースノートをご確認ください。

3 インストレーション

この章では、ObserveIT ソフトウェアの入手からインストレーションまでの作業について説明します。

注記: この資料では評価目的のため、ObserveIT サーバーコンポーネントを1台のマシンにインストールする手順を紹介します。お客様の環境・規模によっては、この資料で紹介するインストレーションおよび構成が本番運用に適さない可能性がありますので、あらかじめご了承ください。本番運用に適したインストレーションおよび構成については、弊社までお問い合わせください。

以下の内容を含みます。

- ソフトウェアの入手
- 評価ライセンスの入手
- Microsoft Internet Information Services(IIS)の設定
- SQL Serverの設定
- ObserveITインストレーション
- ObserveITエージェントのインストール

3.1 ソフトウェアの入手

ここでは、ObserveIT 正規版ソフトウェアの入手手順について説明します。

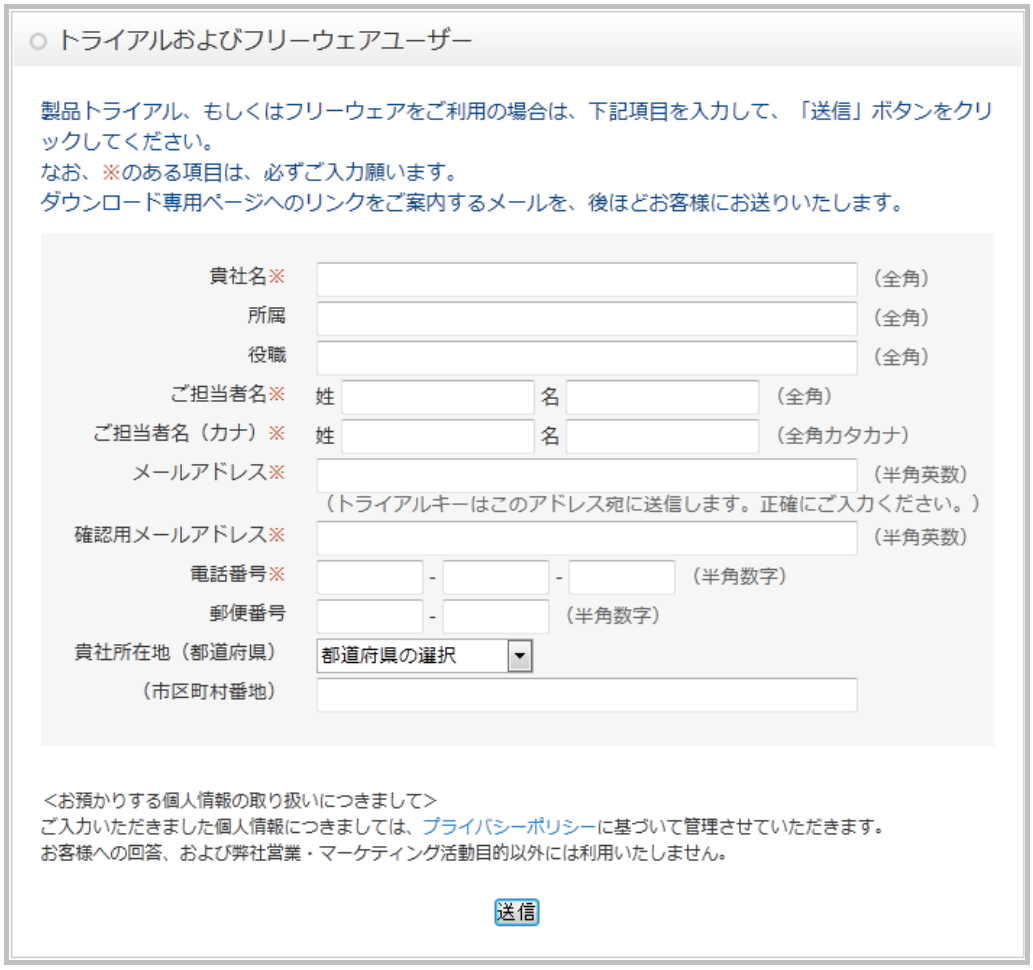
ObserveIT 正規版ソフトウェアの入手手順

Step 1. Webブラウザを開き、以下のURLにアクセスします。

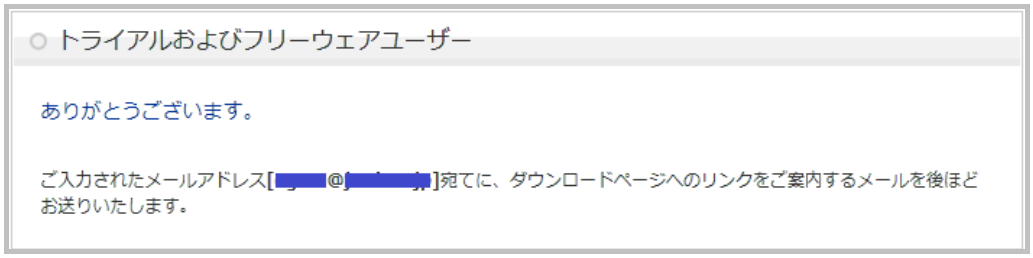
https://www.jtc-i.co.jp/support/download/index.php

Step 2. 下記画面に必要項目を入力し、「**送信**」ボタンをクリックします。

注記: E メールフィールドには、企業の有効な E メールアドレスを入力してください。
数分後にこの E メールアドレスに評価ライセンスの入手に関するメールが届きます。



Step 3. 「**送信**」ボタンをクリックしたら、メール配信のご案内が表示されます。



Step 4. メールが届いたら、案内されたダウンロードページにアクセスすると、ダウンロードページが表示されます。ダウンロードリストからご希望の製品名をクリックして下さい。

Step 5. 続いてバージョン種類のマークをクリックし、ダウンロードファイルをローカルフォルダに保存します。

3.2 評価ライセンスの入手

ここでは、ObserveIT 正規版評価ライセンスの入手手順について説明します。

注記:

- ObserveIT 正規版の評価期間は評価ライセンス発行日から30日です(ライセンス適用日から30日ではありません)。
- 最大5サーバーを監視できます。
- ObserveIT のすべての機能をご利用いただけます。
- 評価期限が切れると、ObserveIT Web 管理コンソールにログインできなくなります。
- ObserveIT Xpress版(フリー版)のライセンスは、ダウンロードファイルに含まれているの

で、別途申請の必要はありません。(デフォルトファイル名： `ExpressLicense.lic`)

評価ライセンスの入手手順

Step 1. 弊社から届いたメールを開きます。

注記：『ソフトウェアの入手』時に登録したEメールアドレス宛にメールが送信されます。

Step 2. ファイルをローカルフォルダに保存します。

注記：このファイルを ObserveIT インストール時に使用します。

3.3 Microsoft Internet Information Services(IIS)の設定

ObserveIT サーバーコンポーネント(ObserveIT アプリケーションサーバーと ObserveIT Web 管理コンソール) には、Microsoft Internet Information Server (IIS) が必要です。

以下のセクションでは、最も一般的な Windows Server 2003 で IIS 6.0、Windows Server 2008 で IIS 7.0、Windows Server 2008 R2 で IIS 7.5 を構成する作業について説明します。

以下の内容を含みます。

- Windows Server 2003 へのIIS 6.0 インストール
- Windows Server 2008/R2 での IIS 7.Xインストール
- Webサイトの作成およびリスンポートの変更

3.3.1 Windows Server 2003 へのIIS 6.0 インストール

IIS 6.0 をインストールする方法はいくつかありますが、一番簡単なのは、Windows コンポーネントの追加と削除からインストールする方法です。

注記：これらの手順についてさらに学習するには、Microsoft ナレッジベース記事『Windows Server 2003 に IIS をインストールする方法』をご参照ください。

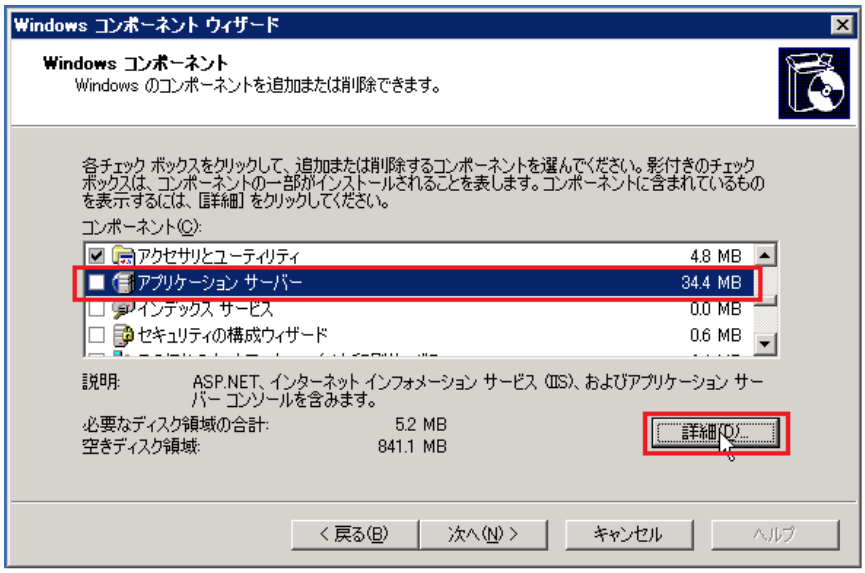
Windows Server 2003 への IIS 6.0 インストール手順

Step 1. 管理者権限を持つアカウントでサーバーにログインします。

Step 2. **スタート > コントロールパネル > プログラムの追加と削除** を選択します。

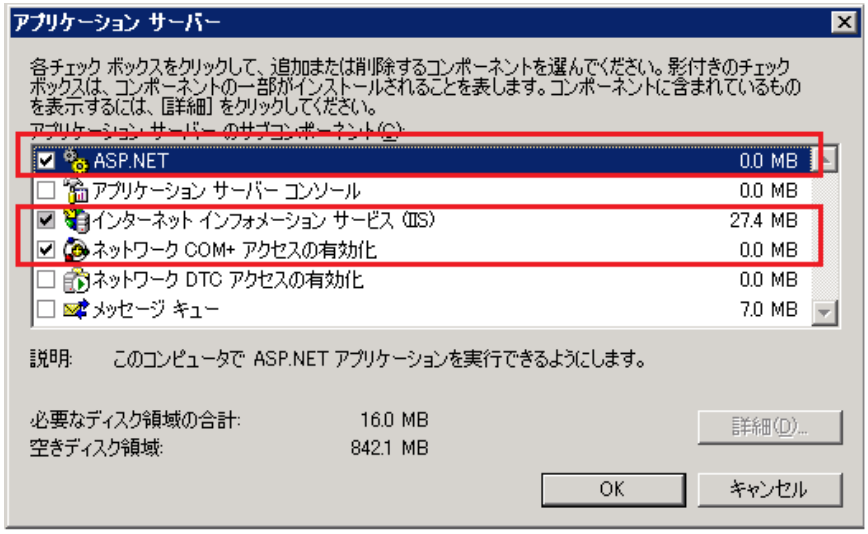
Step 3. **Windows コンポーネントの追加と削除** を選択します。

Step 4. **アプリケーションサーバー**を選択し、**詳細**をクリックします。



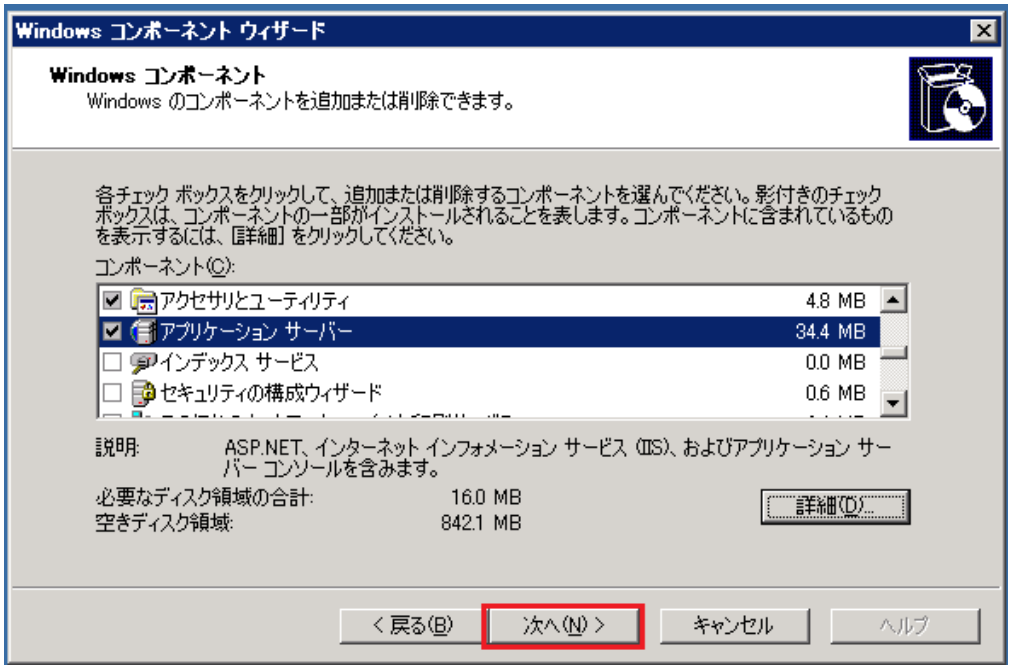
Step 5. **ASP.NET** をチェックします。

注記： **ASP.NET** をチェックすると、**インターネット インフォメーションサービス(IIS)**と**ネットワーク COM+ アクセスの有効化** チェックボックスが自動的に選択されます。

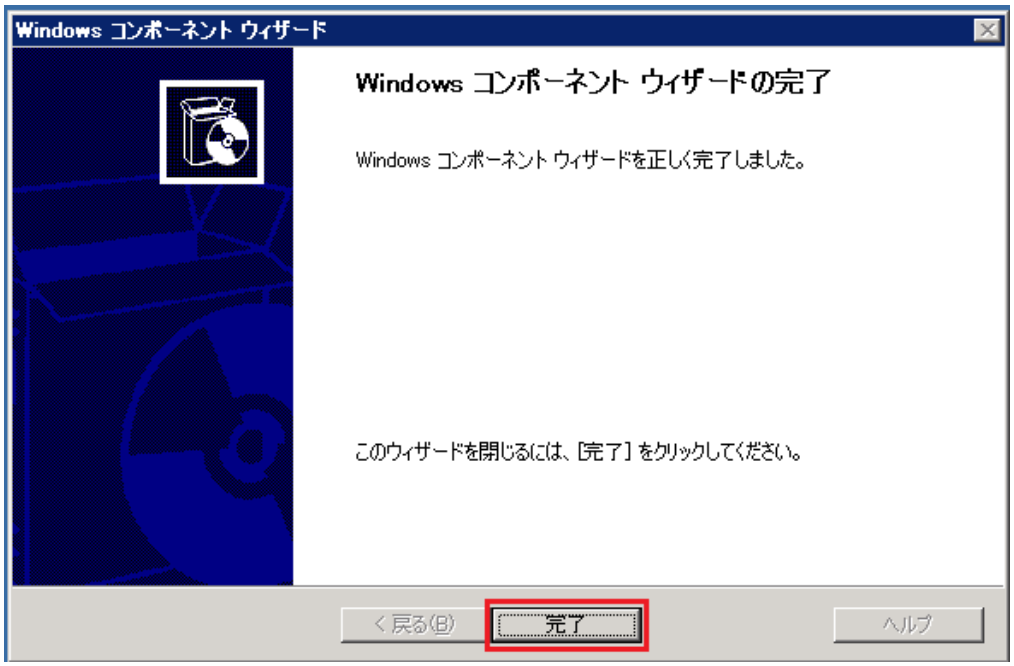


Step 6. **OK** をクリックします。

Step 7. Windows コンポーネントウィザードウィンドウで **次へ**をクリックします。



Step 8. Windows コンポーネントウィザードが終了したら、**完了**をクリックします。



注記: Windows コンポーネントウィザードが Windows オペレーティングシステムメディアまたはコンピューターの再起動を要求した場合は指示に従ってください。

3.3.2 Windows Server 2008/R2 での IIS 7.Xインストール

Windows Server 2008 に IIS 7.0、または Windows Server 2008 R2 に IIS 7.5 をインストールするには、以下の3つの方法があります。

- サーバー マネージャーを使用する
- コマンドプロンプトを使用する(推奨)
- PowerShell を使用する(Windows Server 2008 R2 のみ – 推奨)

上記いずれかの方法で IIS をインストールしてください。

注記: Windows Server 2008 へのIIS 7.0 のインストールまたは、Windows Server 2008 R2 へのIIS 7.5 のインストールに関して詳しく学習したい場合は、オンラインナレッジベース『Installing IIS 7 on Windows Server 2008 or Windows Server 2008 R2』をご参照ください。

サーバー マネージャーを使用してIISをインストールする手順

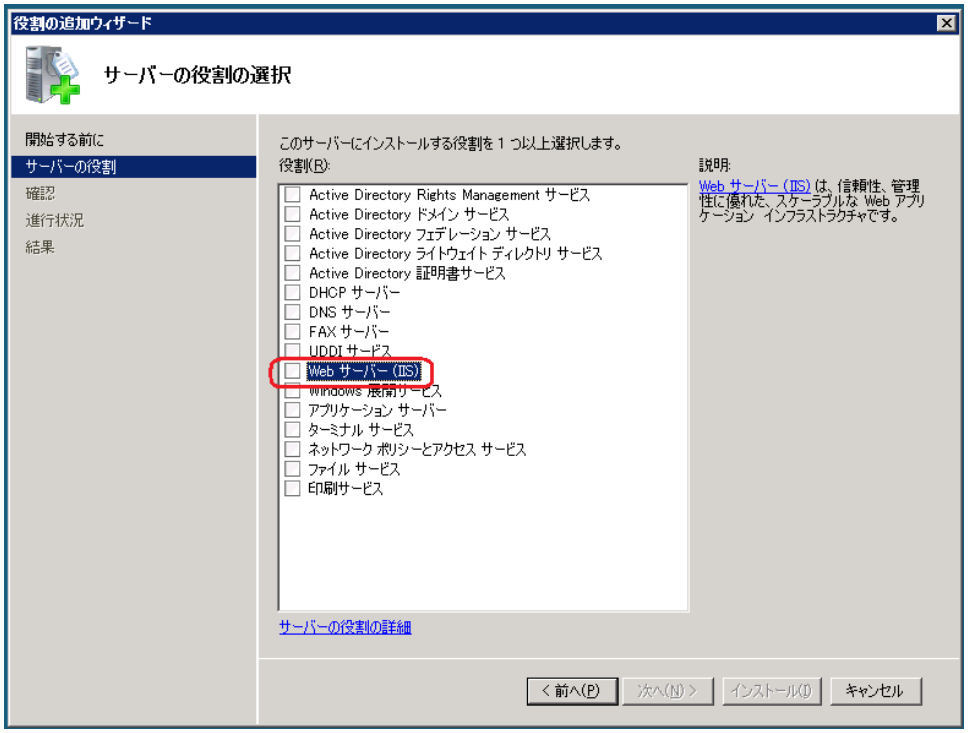
Step 1. **スタート** > **すべてのプログラム** > **管理ツール** > **サーバー マネージャー**をクリックします。

Step 2. 左ペインの**役割**をクリックします。

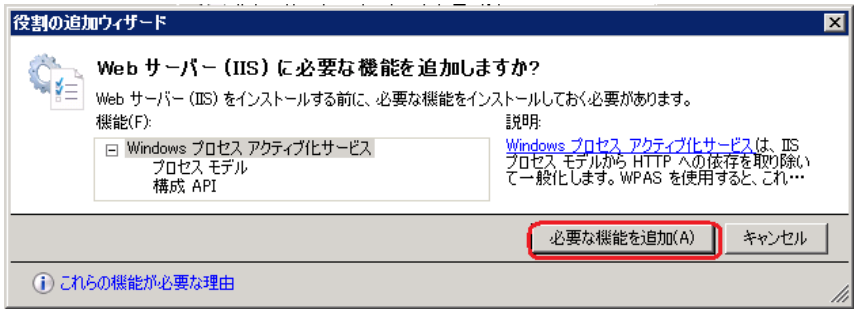
Step 3. メインペイン右側の**役割の追加**をクリックします。

Step 4. **次へ**をクリックし、役割の追加ウィザードを開始します。

Step 5. **Web サーバー (IIS)** を選択します。



Step 6. Web サーバー(IIS) に必要な機能を追加するためのプロンプトが表示されたら、**必要な役割サービスを追加** をクリックします。

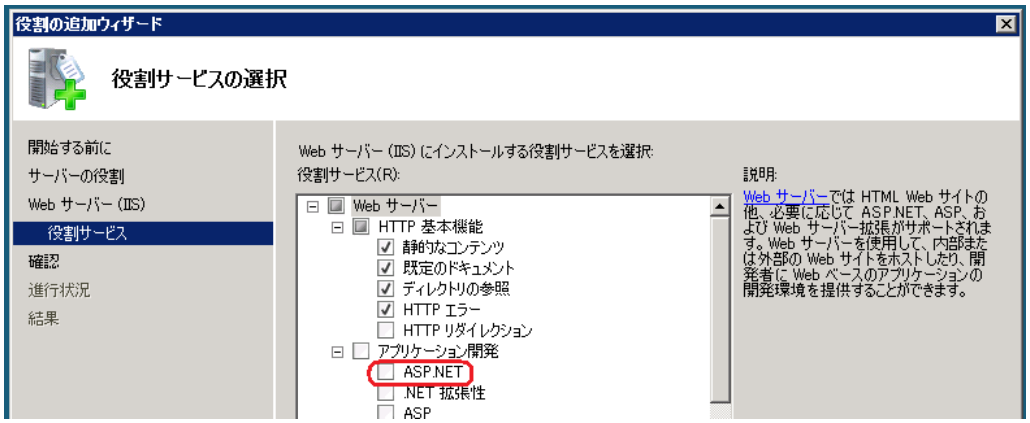


Step 7. 役割サービスの選択ウィンドウで **次へ**をクリックします。

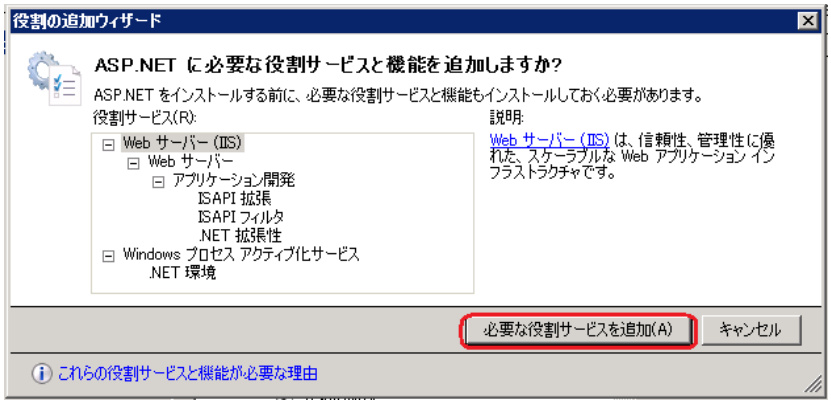
Step 8. Web サーバー (IIS) ウィンドウの **次へ**をクリックします。

Step 9. **共通 HTTP 機能 > 静的コンテンツ** が選択済みであることを確認します。

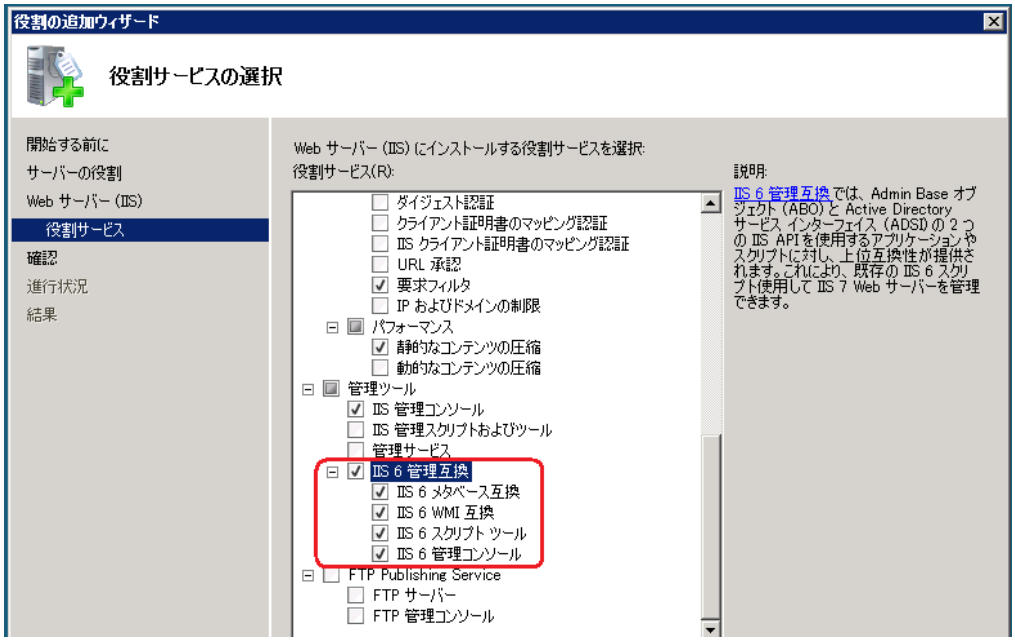
Step 10. **アプリケーション開発 > ASP.NET** を選択します。



Step 11. **必要な役割サービスを追加** をクリックします。



Step 12. **管理ツール > IIS 6 管理互換**を選択します。



Step 13. 役割サービスの選択ウィンドウで**次へ**をクリックします。

Step 14. インストールオプションの確認ウィンドウで、**インストール**をクリックします。

Step 15. インストール結果ウィンドウで、**閉じる**をクリックします。

コマンドプロンプトを使用してIISをインストールする手順

servermanagercmd.exe コマンドラインユーティリティを使用して、必要なコンポーネントをインストールすることができます。このインストール方法はシンプルで、必要なのは適切にコマンドを記述することのみです。これを行うには、コマンドプロンプトを開き、以下の行を入力します。

注記: 以下のコマンドはすべて1行で入力して下さい。これをコピーし、コマンドプロンプトウィンドウに貼り付けてください。

```
Servermanagercmd.exe -i Web-Server Web-WebServer Web-Common-Http
Web-Static-Content Web-Default-Doc Web-Dir-Browsing Web-Http-Errors
Web-App-Dev Web-Asp-Net Web-Net-Ext Web-ISAPI-Ext Web-ISAPI-Filter
Web-Health Web-Http-Logging Web-Request-Monitor Web-Security
Web-Filtering Web-Performance Web-Stat-Compression Web-Mgmt-Tools
Web-Mgmt-Console Web-Mgmt-Console Web-Metabase Web-WMI
Web-Lgcy-Scripting Web-Lgcy-Mgmt-Console RSAT-Web-Server
```

注記: Windows Server 2008 で、.NET Framework 3.0 機能がインストールされていない場合は、インストールする必要があります。コマンドプロンプトを開き、以下の行を入力します。

```
Servermanagercmd.exe -I NET-Framework NET-Framework-Core NET-XPS-Viewer
```

コマンドプロンプトウィンドウを閉じます。サーバーを再起動する必要はありません。

PowerShellを使用してIISをインストールする手順

Windows Server 2008 R2 では、servermanagercmd.exe コマンドラインユーティリティはまだ使用できますが、廃止予定です。Microsoftは同じような機能をPowerShellに追加しています。PowerShellでインストールを行うには、PowerShellプロンプトを開き、以下の行を入力します。

```
import-module servermanager
```

次に、以下の行を入力します。

注記: 以下のコマンドはすべて1行で入力して下さい。このコマンドをコピーし、プロンプトに貼り付けてください。

```
Add-WindowsFeature
Web-Server,Web-WebServer,Web-Common-Http,Web-Static-Content,Web-Defaul
t-Doc,Web-Dir-Browsing,Web-Http-Errors,Web-App-Dev,Web-Asp-Net,Web-Net
-Ext,Web-ISAPI-Ext,Web-ISAPI-Filter,Web-Health,Web-Http-Logging,Web-Re
quest-Monitor,Web-Security,Web-Filtering,Web-Performance,Web-Stat-Comp
ression,Web-Mgmt-Tools,Web-Mgmt-Console,Web-Mgmt-Console,Web-Metabase,
Web-WMI,Web-Lgcy-Scripting,Web-Lgcy-Mgmt-Console,RSAT-Web-Server
```

注記: .NET Framework 3.5.1 がインストールされていない場合は、インストールする必要があります。PowerShell ウィンドウを開き、以下の行を入力します。

注記: 以下のコマンドは1行で入力してください。

```
Add-WindowsFeature NET-Framework,NET-Framework-Core,XPS-Viewer
```

PowerShell ウィンドウを閉じます。サーバーを再起動する必要はありません。

3.3.3 Webサイトの作成およびリスンポートの変更

ObserveIT のインストール時に新しい Web サイトが自動的に作成されますが、カスタムインストレーションを行う必要がある場合は、IIS に追加の Web サイトを手動で作成する必要があります。また、ObserveIT 管理サーバーをホストする Web サイトがリスンするデフォルトの TCP ポートは 4884 ですが、このポートを変更することもできます。
Web サイトの作成およびリスンポートの変更手順については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『インストレーションガイド』をご参照ください。

3.4 SQL Serverの設定

ObserveIT データベースは、Microsoft SQL Server 2005/2008 または SQL Express エディションを要求します。ここでは、ObserveIT の評価を目的として Windows Server 2008 R2 に SQL Server 2008 R2 Express をインストールする手順について説明します。

注記:

- お使いの OS バージョンにあう SQL Server をご使用ください。
- 以下は ObserveIT の評価を目的としたインストール手順であるため、SQL Server Express を ObserveIT サーバーと同一サーバーにインストールし、ほとんどの設定項目を変更しません。この構成および設定は本番運用では適切ではないことをあらかじめご了承ください。

SQL Server 2008 R2 Express のインストール手順

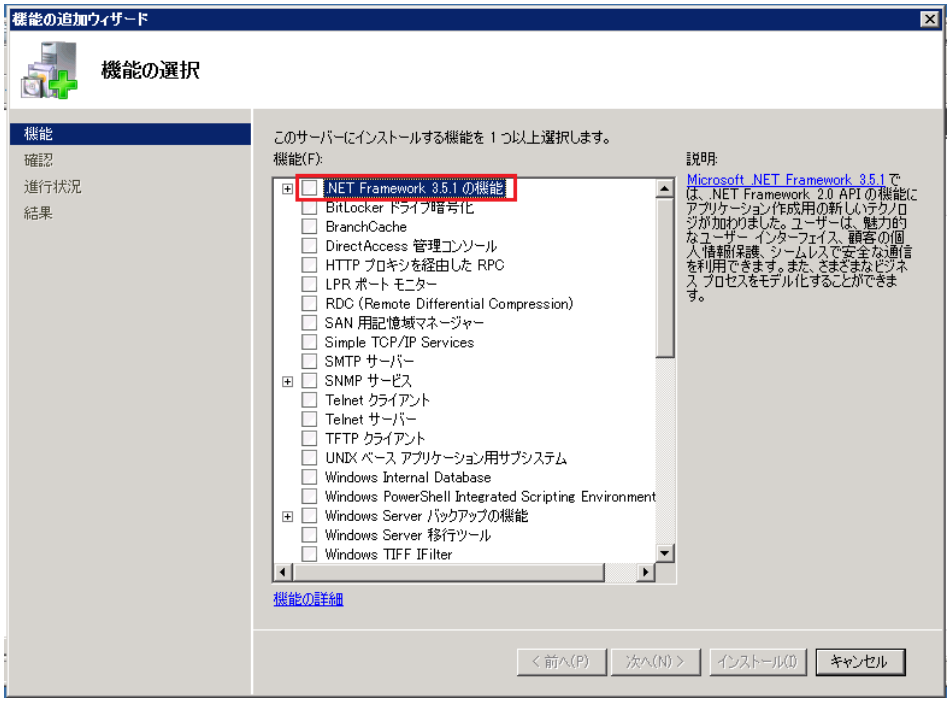
Step 1. Microsoft Download Center から Microsoft SQL Server 2008 R2 Express（または Microsoft SQL Server 2008 R2 Express with Management Tools）をダウンロードします。

- Microsoft SQL Server 2008 R2 RTM – Express:
  http://www.microsoft.com/downloads/ja-jp/details.aspx?FamilyID=8B3695D9-415E-41F0-A079-25AB0412424B
- Microsoft SQL Server 2008 R2 RTM – Express with Management Tools:
  http://www.microsoft.com/downloads/ja-jp/details.aspx?FamilyID=967225EB-207B-4950-91DF-EEB5F35A80EE

注記: 事前にシステム要件、注意事項を満たしていることをご確認ください。

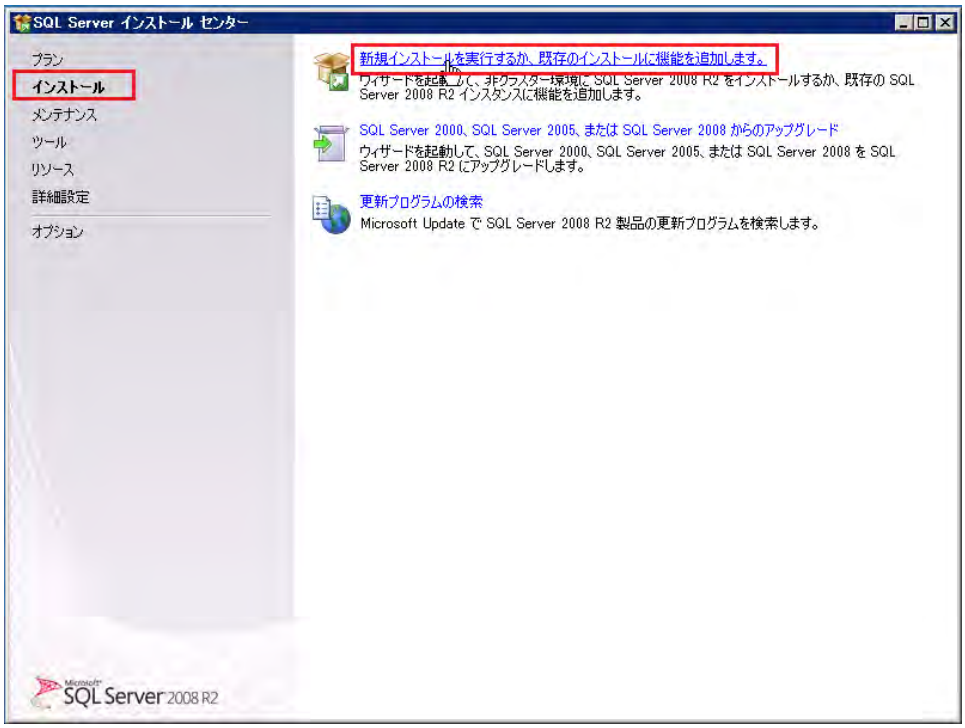
Step 2. （Microsoft .Net Framework 3.5 SP1 以降がインストールされていない場合は）.Net Framework をインストールします。

Windows Server 2008 R2 をご使用の場合は、**サーバーマネージャー**を開き、**機能 > 機能の追加**をクリックします。**必要な機能を追加** をクリックし、**次へ**、**インストール**を選択します。インストールが完了したら、**閉じる**をクリックします。

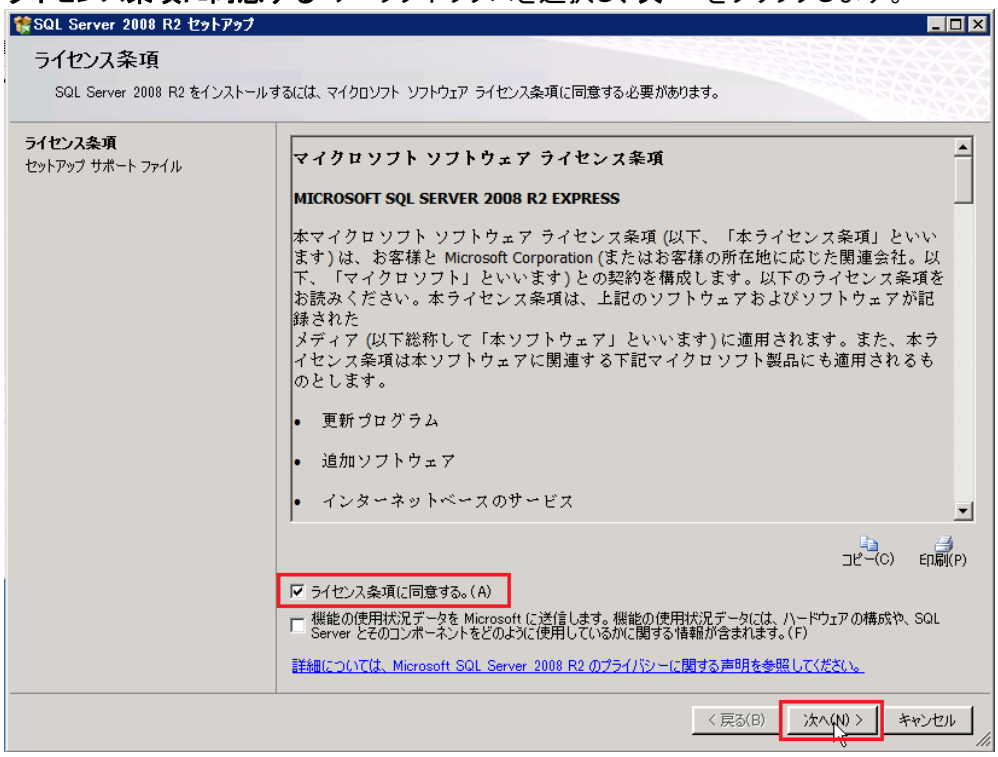


Step 3. ダウンロードしたインストーラーを起動します。

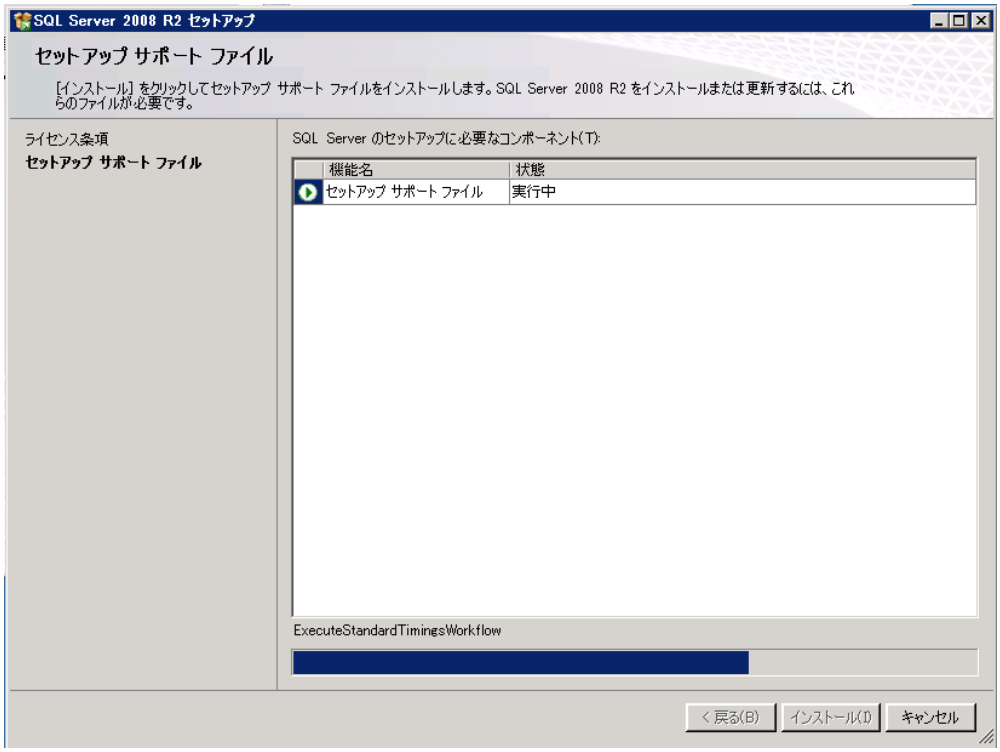
Step 4. **新規インストールを実行するか、既存のインストールに機能を追加します。**リンクをクリックします。



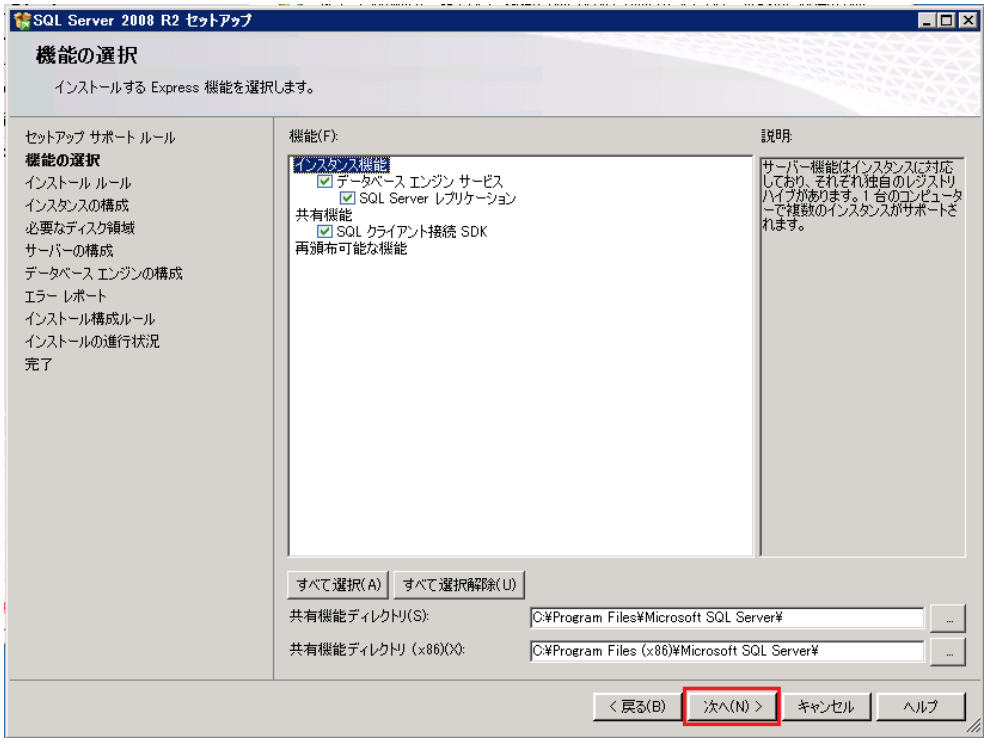
Step 5. **ライセンス条項に同意する** チェックボックスを選択し、**次へ** をクリックします。



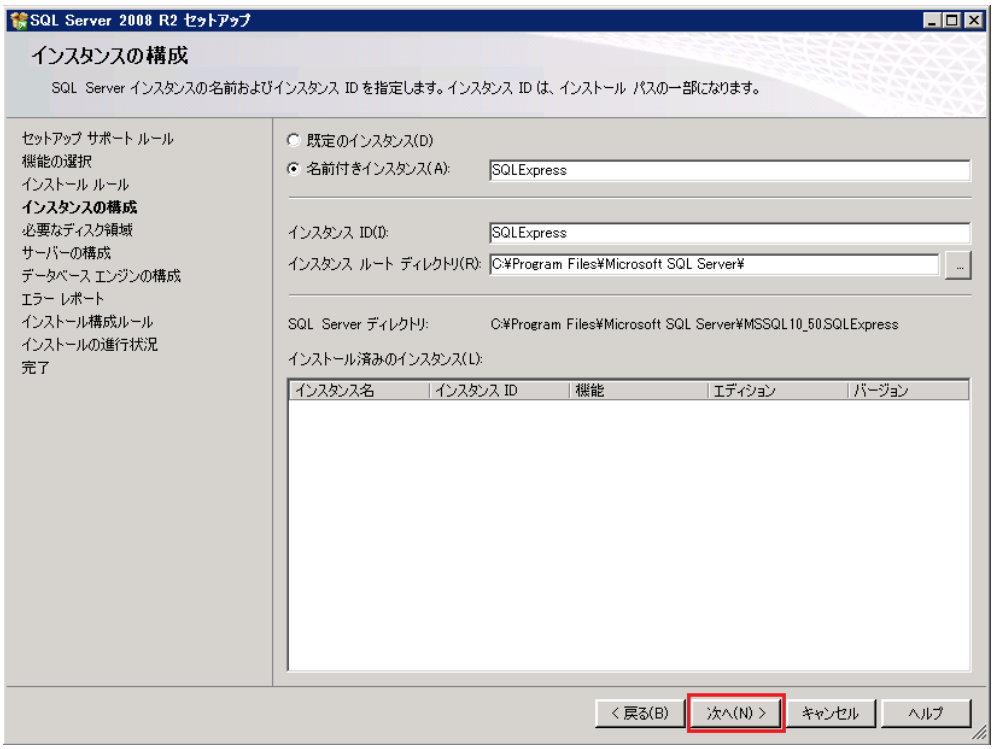
Step 6. セットアップ サポートファイルのインストール処理が終了するのを待ちます。



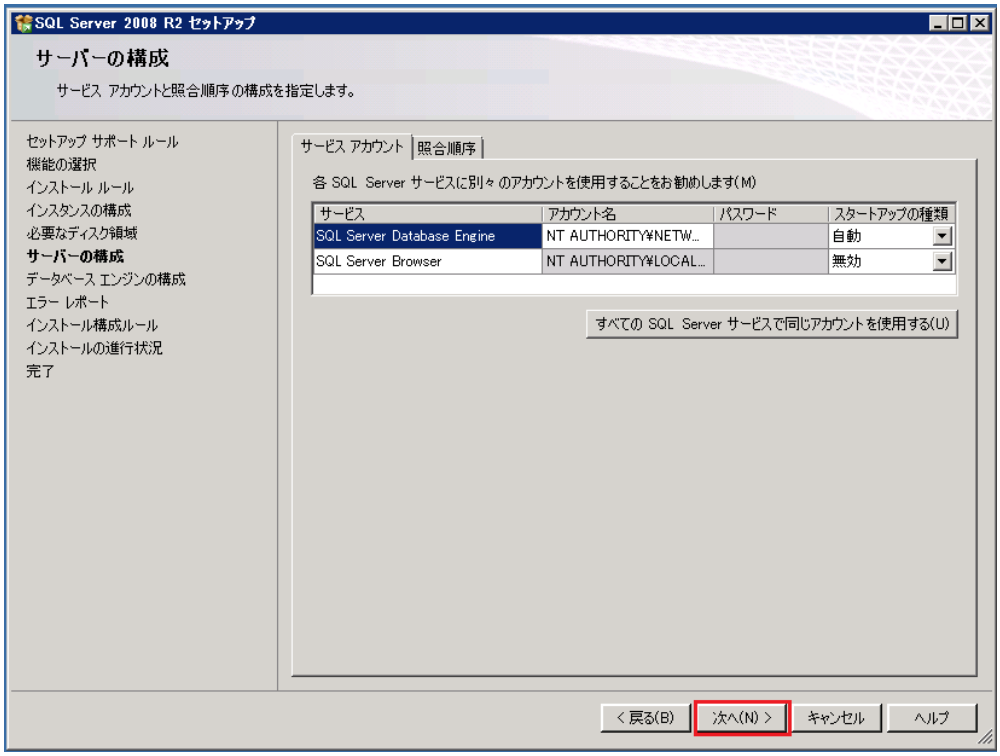
Step 7. 機能の選択画面で、**次へ**をクリックします。



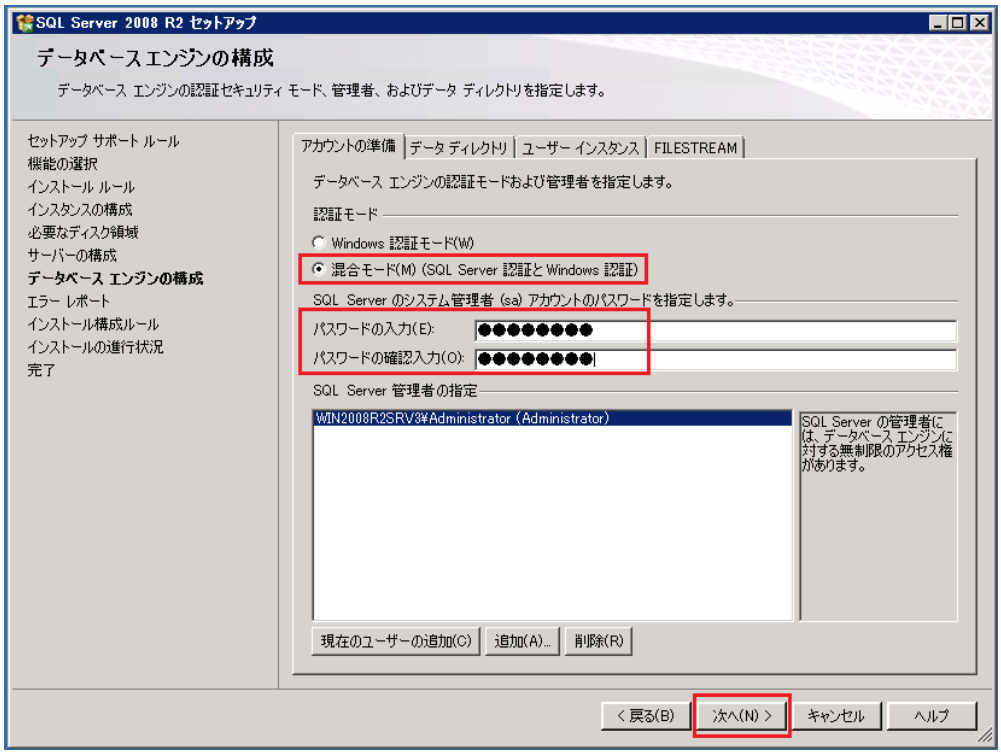
Step 8. インスタンスの構成画面で、**次へ**をクリックします。



Step 9. サーバーの構成画面で、**次へ**をクリックします。

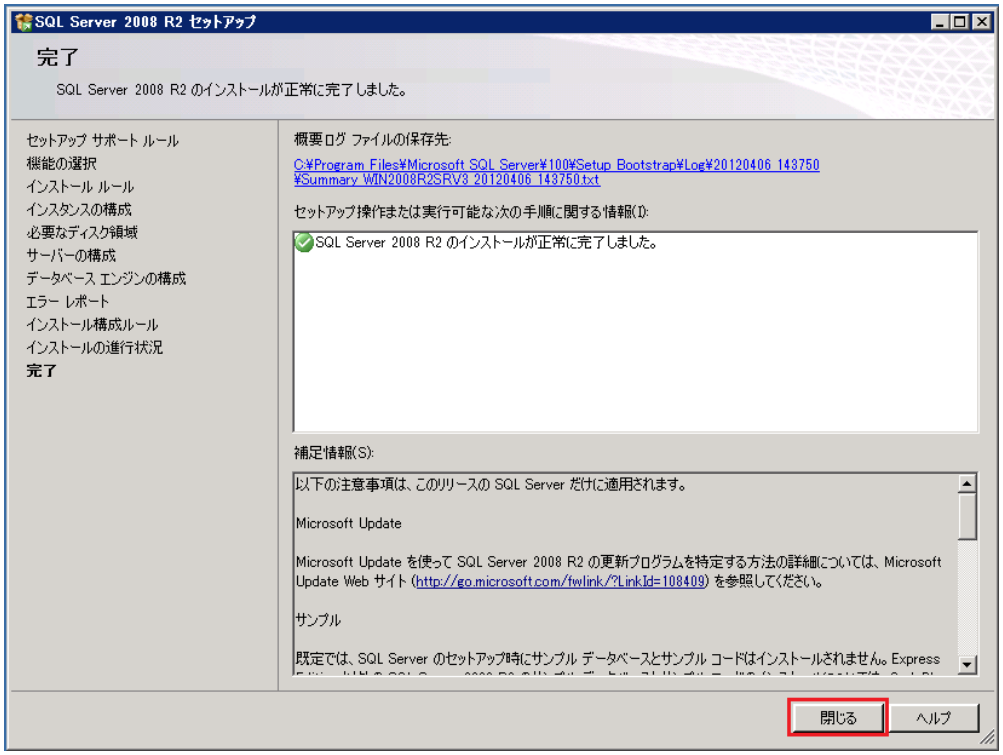


Step 10. 認証モードセクションで**混合モード**を選択し、**パスワードの入力**および**パスワードの確認入力**フィールドにsaのパスワードを入力して**次へ**をクリックします。



Step 11. エラーレポート画面で、**次へ**をクリックします。

Step 12. インストールが完了したら、**閉じる**をクリックします。



Step 13. SQL Server インストール センター画面も[×]ボタンをクリックして閉じます。

3.5 ObserveITインストレーション

ここでは、ObserveIT のインストール方法のうち一番簡単な"ワンクリック"インストレーションでのインストール手順について説明します。このインストール方法を使用すれば、一度にすべての ObserveIT サーバーコンポーネントをインストールすることができます。

注記:

- ObserveIT をインストールする前に、IIS サーバーと SQL Server にアクセスできることをご確認ください。
- 3つの ObserveIT サーバーコンポーネントを別々にインストールすることも可能です。この手順については『ObserveIT 製品マニュアル』の『インストレーションガイド』をご参照ください。

ObserveIT インストール手順

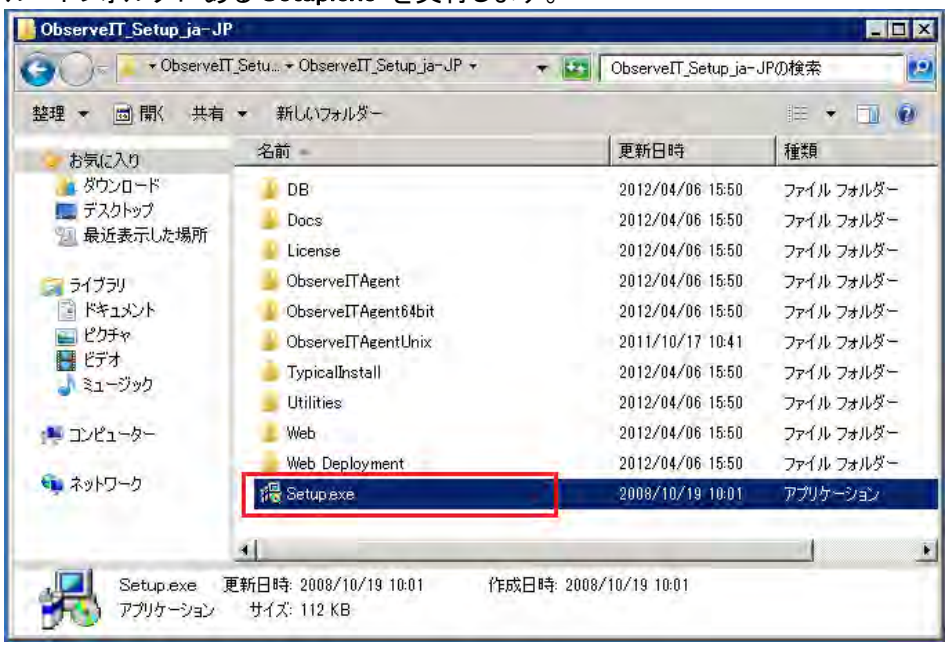
Step 1. ObserveIT をインストールするマシンに管理者権限を持つユーザーでログインします。

Step 2. 『3.1ソフトウェアの入手』で入手したSetupファイルをコピーします。

Step 3. zip ファイルを解凍します。

注記: zip ファイルを解凍してください。解凍していない zip ファイル内の Setup.exe を使用しないでください。

Step 4. ルートフォルダにある **Setup.exe** を実行します。



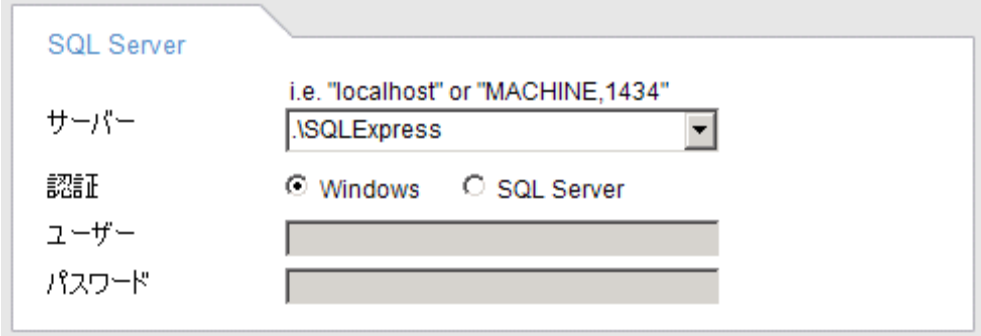
Step 5. インストレーション画面が表示されます。この画面には SQL Server、Web コンソール、ライセンス、インストール ログと進行状況の4つのセクションがあります。

Step 6. SQL Serverセクションの**サーバー** ドロップダウンリストからSQL Serverの名前を選択するか、名前を入力します。『3.4 SQL Serverの設定』の手順どおりに同一サーバー上にSQL Server Expressをインストールした場合は、.¥SQLEXPRESSと入力します。

注記: 別サーバーのSQL Serverインスタンスを使用する場合は、
<サーバー名>¥<インスタンス名>,<ポート番号>
の形式で入力してください。

Step 7. 認証方法を選択します。

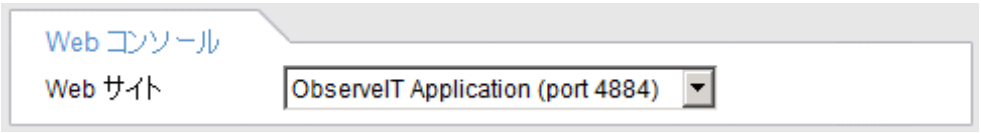
『3.4 SQL Serverの設定』の手順どおりに同一サーバー上にSQL Server Expressをインストールした場合は、**Windows**のままで構いません。**SQL Server**を選択した場合は、SQL Serverのログインユーザーとパスワードを入力します。



注記:

- 現在のアカウントが SQL Server 管理者である場合は、インストレーション時に Windows 認証を使用できます。
- 最低dbcreator権限が必要です。

Step 8. 初期設定では ObserveIT はローカルサーバー上の IIS 設定を探し、TCP 4884 ポートをリスンする追加の Web サイトを作成することを提案します。**Web サイト** ドロップダウンリストから、ObserveIT 管理サーバーで使用する Web サイトを選択します。



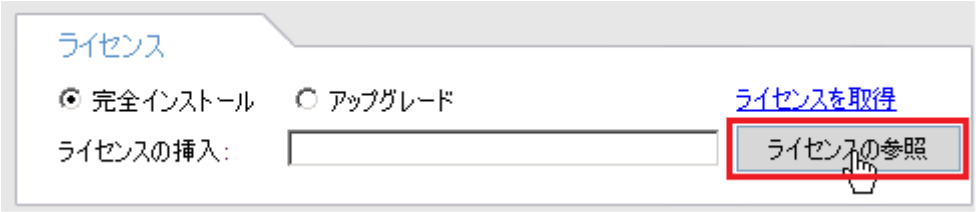
これにより、すべての ObserveIT エージェントは TCP 4884 ポートを使用して ObserveIT アプリケーションサーバーと通信するようになります。また、ObserveIT Web 管理コンソールと接続する際にも、ユーザーは同じポートを使用する必要があります。

注記:

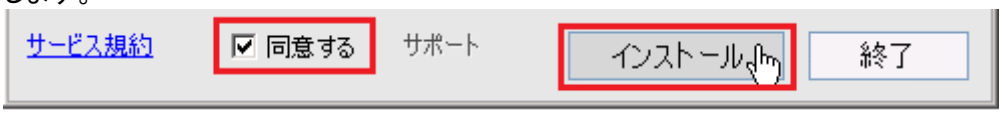
- 必要に応じて、またはユーザーの環境において専用のポートを使用できない場合は、ObserveIT 仮想ディレクトリをホストする Default Web Site を使用することができます。ObserveIT のインストール前に手動で新しい Web サイトを作成し、ユーザーが選択したポートを使用するように構成することもできます。

- 新しい専用の Web サイトを使用することをお勧めします。

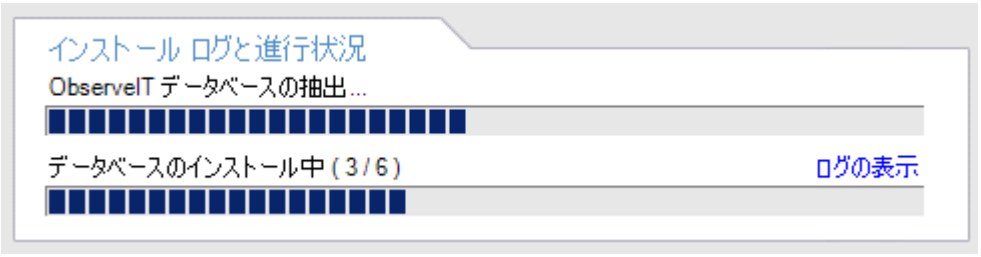
Step 9. ライセンスセクションで、**ライセンスの参照**をクリックし、『3.2 評価ライセンスの入手』で入手したライセンスファイルを指定します。



Step 10. サービス規約セクションの **同意する** チェックボックスを選択し、**インストール** をクリックします。

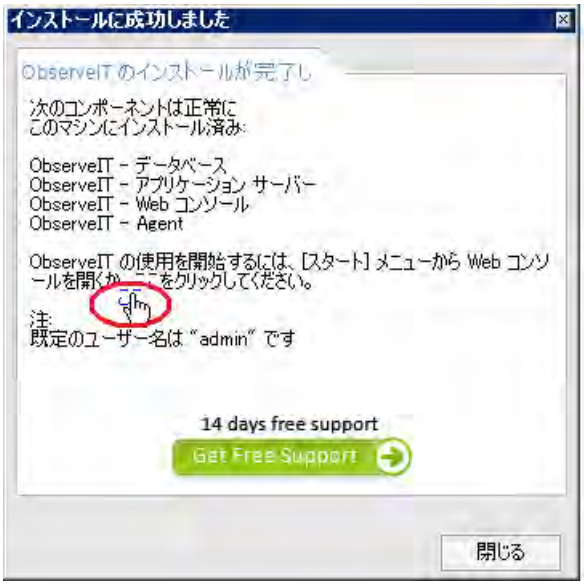


Step 11. インストール ログと進行状況セクションに、インストールの進捗状況が表示されます。



ログの表示 リンクをクリックすると、インストール処理を説明するテキストメッセージが表示されます。

Step 12. インストールが完了したら、**終了** ボタンをクリックして ObserveIT インストーラーを閉じます。**ここ** リンクをクリックすると、ObserveIT Web 管理コンソールが開きます。



Step 13. （http://127.0.0.1 のコンテンツがブロックされるメッセージ画面が表示される場合は）**追加** をクリックし、信頼済みサイトに追加します。

Step 14. admin アカウントのパスワードを設定し、**ログイン**をクリックします。

Step 15. サーバーダイアリーページが表示されます。

重要: Windows Server 2008 および Windows Server 2008 R2 では、設定されていないアプリケーションやポートへの受信接続をブロックするように構成されています。Windows ファイアウォールを無効にすることは可能ですが、これを行うとネットワークまたはセキュリティの脅威が増します。このため、必要なポートまたはアプリケーションのみをファイアウォールを通過できるように設定することをお勧めします。デフォルトの TCP 4884 ポートを使用している場合は、TCP 4884 の受信を許可して下さい。

3.6 ObserveITエージェントのインストール

ObserveIT エージェントは監視または記録したいコンピューターにインストールする必要があります。ObserveIT エージェントは、ライセンスの上限に達するまで配備できます（評価ライセンスの上限は5エージェントです）。

どのマシンにエージェントをインストールするかは、ObserveITの展開シナリオによって異なります。

注記: ジャンプサーバーゲートウェイ展開で適用するターミナルサービスタイプのライセンスは、ターミナルサービス役割がインストールされているWindows Server 2000/2003/2008 またはリモートデスクトップサービス役割がインストールされているWindows Server 2008 R2 が起動しているコンピューター用です。ジャンプサーバーにインストールするエージェントは標準エージェントベースの展開（サーバー & デスクトップ）でインストールするエージェント（Windows）と同じです。インストール手順については、Windowsエージェントのインストールをご参照ください。

3.6.1 Windowsエージェントのインストール

監視および記録を行いたい Windows コンピューターに ObserveIT エージェントをインストールします。ここでは、Windows エージェントを Setup.exe を起動して手動でインストールする手順について説明します。その他のインストール手順については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『インストレーションガイド』をご参照ください。

注記: 監視対象サーバーの数が少ない場合は、おそらく各システムにエージェントを手動でインストールするのが簡単です。大規模な配備の場合は、Microsoft System Management Server のようなソフトウェア配備アプリケーションやインストレーションパッケージを配布するためのログオンスクリプトを使用できます。

ObserveIT Windows エージェントをインストールする前に以下の作業を実行してください。

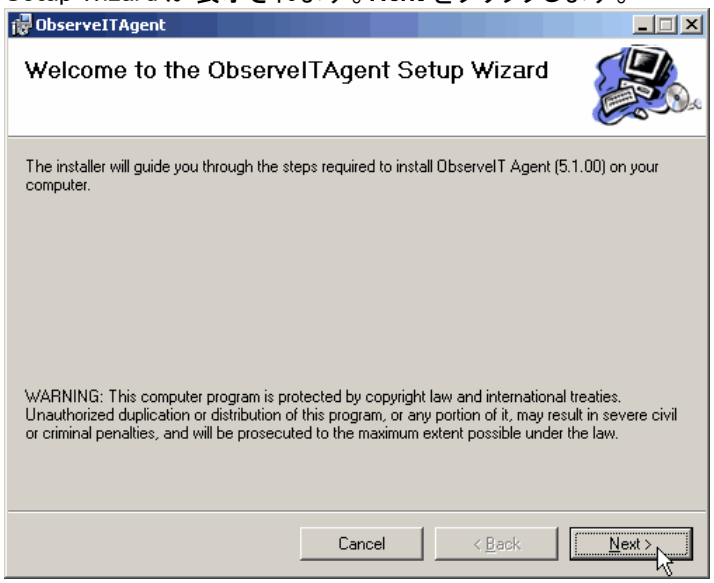
- OS に最新のアップデートとベストプラクティス、重要なパッチを適用してください。
- サーバーがシステム要件を満たしていることをご確認ください。
- ObserveIT Windows エージェントをインストールするコンピューターに管理者権限を持つアカウントでログインしてください。
- ObserveIT アプリケーションサーバーをホストするコンピューターの IP アドレスとホスト名をご準備ください。
- ObserveIT エージェントと ObserveIT アプリケーションサーバーが起動するコンピューター間にファイアウォールが存在する場合は、ObserveIT アプリケーションサーバーが通信する TCP ポートがファイアウォールを通過できるように設定する必要があります。ObserveIT の初期ポートは 4884 です。

Windows エージェントの手動インストレーション手順

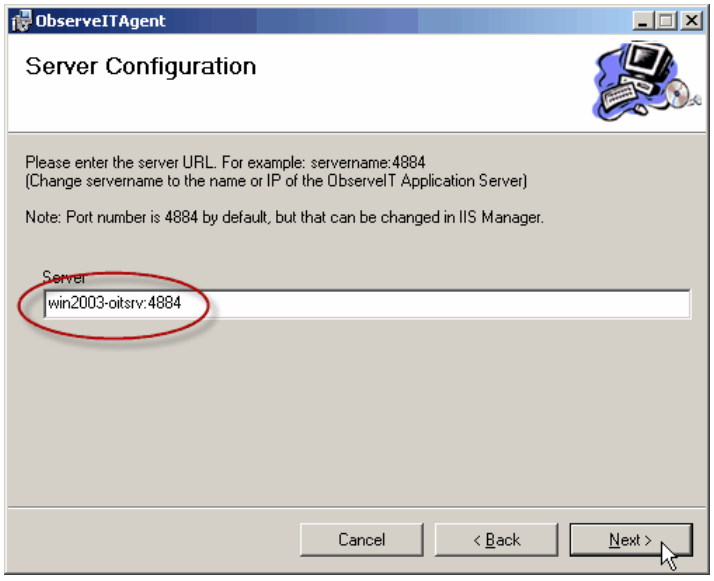
Step 1. ObserveIT エージェントをインストールしたい Windows マシンに、管理者権限を持つユーザーでログインします。

Step 2. 解凍したインストールパッケージ¥ObserveITAgent（64bitマシンの場合は、¥ObserveITAgent64bit）フォルダにあるSetup.exeを実行します。

Step 3. Setup Wizard が表示されます。**Next** をクリックします。

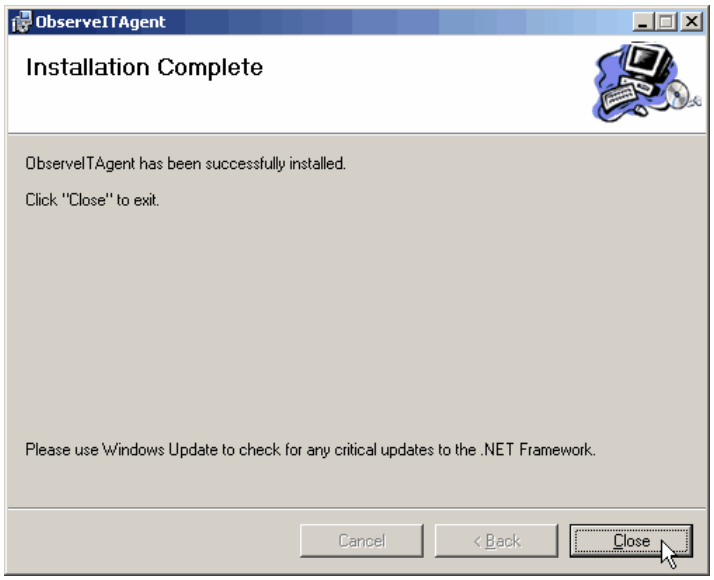


Step 4. エージェントが通信を行う ObserveIT アプリケーションサーバーの URL（FQDN:ポート番号 または IP アドレス:ポート番号）を指定し、**Next** をクリックします。



注記： 初期設定では、ObserveIT サーバーは通信に TCP 4884 ポートを使用します。ObserveIT サーバーが通信に使用するポートを変更した場合は、変更したポート番号を指定してください。

Step 5. エージェントのインストールが完了したら、Installation Complete 画面が表示されます。**Close** をクリックし、ウィザードを閉じます。



インストールが成功したら、Windows マシンを使い始めることができます。初期設定ではすべてのユーザーアクションが記録されます。評価が必要なすべての Windows マシンについてこの作業を行ってください。

注記: ObserveIT エージェントの起動中は、システムトレイの通知領域に ObserveIT エージェントアイコンが表示されます。

このアイコンは非表示にすることもできます。アイコンを非表示にする手順については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』をご参照ください。

4 ObserveITクイックツアー

ObserveIT のインストールに成功したら、監視対象サーバー上のユーザーセッションを記録したり再生したりできます。この章では、はじめて ObserveIT をお使いいただく方向けに基本的な機能の操作方法を紹介します。

以下の内容を含みます。

- ユーザーセッションを記録する
- ObserveIT Web管理コンソールにログインする
- 記録済みセッション(アクティビティ)を検索する
- 記録済みセッション(アクティビティ)を再生する
- レポートを使用する

4.1 ユーザーセッションを記録する

ユーザーが監視対象コンピューターにログインした瞬間から、彼らのすべてのアクションが記録されます。

注記: 初期設定では、すべてのユーザーのすべてのアクションが記録されますが、記録するアクションを制御することもできます。詳しい内容については『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』をご参照ください。

Windows エージェントをインストールしたマシンには、システムトレイの通知領域に ObserveIT エージェントアイコンが表示されます。

このアイコンは非表示にすることもできます。アイコンを非表示にする手順については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』をご参照ください。

Unix/Linux エージェントがインストールされたマシンでは、ユーザーが監視対象サーバー上またはリモートから CLI 操作を開始すると ObserveIT が記録を開始します。

4.2 ObserveIT Web管理コンソールにログインする

ObserveIT Web 管理コンソールは、ObserveIT ユーザーが記録済みセッションアクティビティの検索、再生、ObserveIT の構成変更を行うために使用するインターフェイスです。
ここでは、ObserveIT Web 管理コンソールにログインする方法とWeb 管理コンソールの画面構成について説明します。

ObserveIT Web 管理コンソールへのログイン手順

Step 1. （ObserveIT Web 管理コンソールがインストールされたサーバーから ObserveIT Web 管理コンソールにログインする場合は） **スタート** > **すべてのプログラム** > **ObserveIT** > **ObserveIT WebConsole** を選択します。

Step 2. （ObserveIT Web 管理コンソールがインストールされたサーバー以外から ObserveIT Web 管理コンソールにログインする場合は） Web ブラウザを起動し、
http://<servername>:4884/ObserveIT にアクセスします。

注記:

- *<servername>*は ObserveIT Web 管理コンソールがインストールされたサーバーの名前または IP アドレスです。
- 初期設定では、TCP ポート 4884 を使用します。ObserveIT のインストール時にポート番号を変更した場合は、そのポート番号を指定してください。
- 通信に使用するポート（初期設定では TCP 4884）がファイアウォールでブロックされていないことをご確認ください。

Step 3. （ObserveIT Web 管理コンソールへはじめてアクセスする場合は）Admin パスワードの設定を要求する画面が表示されます。**パスワード**、**パスワードの確認** フィールドにパスワードを入力し、**ログイン** をクリックします。

注記: パスワードは大文字小文字が区別されます。

Step 4. （ObserveIT Web 管理コンソールへのアクセスが2回目以降の場合は）ログインする**ユーザー名** と **パスワード** を入力し、**ログイン** をクリックします。

Step 5. サーバーダイアリーページが表示されます。

ObserveIT Web 管理コンソールの画面構成

ObserveIT Web 管理コンソールは、シンプルで直感的に操作できます。ここでは、ObserveIT Web 管理コンソールの構成について簡単に説明します。

以下は、ObserveIT ログイン直後の画面例です。

インターフェイス上部に機能ビューを切り替えるためのタブがあります。これがメインメニューです。任意のメインメニューをクリックするとそのメニューに関連するオプションメニューが画面の左側に表示されます。オプションメニューの下部には、直近のアクティビティへのクイックリンクが表示されます。

メインメニューとその使用用途は以下の通りです。詳しい情報については『ObserveIT 製品マニュアル』の『利用ガイド』または『構成ガイド』をご参照ください。

メインメニュー	使用用途
サーバーダイアリー	監視対象サーバーまたはコンピューター上で "誰が何をしたか" を確認するために使用します。
ユーザーダイアリー	特定のユーザーが監視対象サーバーまたはコンピューター上で "何をしたか" を確認するために使用します。
構成	識別、サーバーポリシー、アーカイブ設定など、ObserveIT の構成変更を行うために使用します。
検索	フリーテキスト検索を行うために使用します。
レポート	レポートの表示、カスタムレポートの作成、レポートのスケジュール設定を行うために使用します。
トレーニング	トレーニング目的で保存したアクティビティを再生するために使用します。
バージョン情報	ObserveIT のバージョン情報を確認するために使用します。

4.3 記録済みセッション(アクティビティ)を検索する

ObserveIT は、ユーザーが調査したいセッション(またはアクティビティ)を素早く見つけるためのさまざまな機能を提供します。このため、ユーザーは調査のために記録済みセッションすべてを1つ1つ再生して確認する必要がありません。ここでは、調査したいセッション(またはアクティビティ)を特定するために使用できる主な検索機能を紹介します。

4.3.1 サーバーを指定してセッション(アクティビティ)を見つける

サーバーダイアリーページでは、特定の期間に特定のサーバー上で誰が何を行ったかを簡単に確認することができます。

サーバーを指定してセッション(アクティビティ)を見つける手順

Step 1. ObserveIT Web 管理コンソールにログインしていない場合は、ログインします。

Step 2. **サーバーダイアリー** タブをクリックします。

Step 3. **サーバー** フィールドに調査したいサーバーの名前を入力するか、 をクリックして サーバー リスト ポップアップ画面からサーバー名を選択します。

選択したサーバーのログインセッションが、新しい順にリスト表示されます。

1行が1ユーザーセッションを表します。ユーザーセッションはユーザーのログイン時に開始し、ユーザーのログアウト時またはアクティブでない時間が15分経過（この値は構成ポリシで変更できます）したら終了します。各行には、日にち、時間、ログイン名（Windows ログイン処理時に使用されたユーザーアカウント）、実際のユーザー名（ObserveIT 識別サービス使用時）、サーバー名、接続が開始されたコンピューターの名前、キャプチャされたスライド数、ビデオアイコンが表示されます。

Step 4. 必要に応じて、期間セクションで期間（過去 X 日/週/月/年、または開始日と終了日）を指定します。

Step 5. 必要に応じて、**ログインユーザー別フィルタ** ドロップダウンリストからログインユーザーを指定します。

Step 6. 記録済みのセッション全体を再生したい場合は、 アイコンをクリックします。
ObserveIT スライドビューアーが起動し、そのセッションの再生が開始します。

Step 7. セッション中のユーザーアクティビティの詳細を確認したい場合は、[＋]ボタンをクリックします。

セッションが展開され、ユーザーがセッション中にアクセスしたすべてのアプリケーション、ファイル、Window タイトルが表示されます。 アイコンをクリックすると、特定のユーザーアクティビティからセッションを再生することができます。

その他、アプリケーション、インベントリ、ソフトウェア、検索、メッセージオプションメニューについては、『ObserveIT 製品マニュアル』の『利用ガイド』をご参照ください。

4.3.2 ログインユーザーを指定してセッション（アクティビティ）を見つける

ユーザーダイアリーページでは、特定の期間に特定のユーザーがどのサーバーで何を行ったかを簡単に確認することができます。

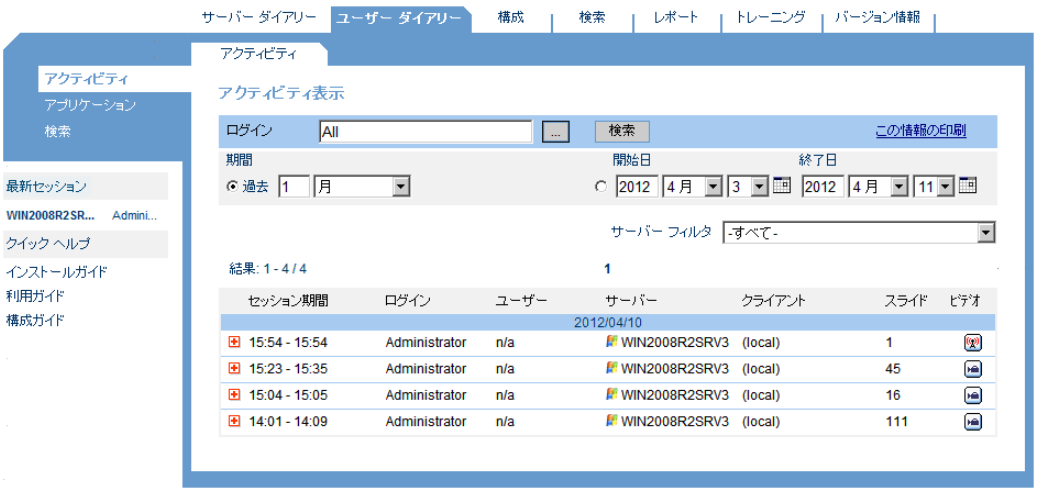
ログインユーザーを指定してセッション(アクティビティ)を見つける手順

Step 1. ObserveIT Web 管理コンソールにログインしていない場合は、ログインします。

Step 2. **ユーザーダイアリー** タブをクリックします。

Step 3. **ログイン** フィールドに調査したいユーザーの名前を入力するか、 をクリックしてログイン リスト ポップアップ画面からログイン名を選択します。

選択したログインユーザーのセッションが、新しい順にリスト表示されます。



1行が1ユーザーセッションを表します。ユーザーセッションはユーザーのログイン時に開始し、ユーザーのログアウト時またはアクティブでない時間が15分経過(この値は構成ポリシで変更できます)したら終了します。各行には、日にち、時間、ログイン名(Windows ログイン処理時に使用されたユーザーアカウント)、実際のユーザー名(ObserveIT 識別サービス使用時)、サーバー名、接続が開始されたコンピューターの名前、キャプチャされたスライド数、ビデオアイコンが表示されます。

Step 4. 必要に応じて、期間セクションで期間(過去 X 日/週/月/年、または開始日と終了日)を指定します。

Step 5. 必要に応じて、**サーバーフィルタ** ドロップダウンリストからサーバーを指定します。

Step 6. 記録済みのセッション全体を再生したい場合は、 アイコンをクリックします。
ObserveIT スライドビューアーが起動し、そのセッションの再生が開始します。

Step 7. セッション中のユーザーアクティビティの詳細を確認したい場合は、[+]ボタンをクリックします。

セッションが展開され、ユーザーがセッション中にアクセスしたすべてのアプリケーション、ファイル、Window タイトルが表示されます。 アイコンをクリックすると、特定のユーザーアクティビティからセッションを再生することができます。

その他、アプリケーション、検索オプションメニューについては、『ObserveIT 製品マニュアル』の『利用ガイド』をご参照ください。

4.3.3 フリーテキスト検索機能を使用してセッション(アクティビティ)を見つける

検索ページでは、"レジストリ"、"メモ帳"、"削除"などの単語でユーザーのアクティビティを検索することができます。結果は、アクションの内容やなぜ ObserveIT がその結果を返したのかがわかるように表示されます。

フリーテキスト検索機能を使用してセッション(アクティビティ)を見つける手順

Step 1. ObserveIT Web 管理コンソールにログインしていない場合は、ログインします。

Step 2. **検索** タブをクリックします。

Step 3. **検索文字列** フィールドに検索キーワードを入力します。

Step 4. 必要に応じて、**検索範囲** ドロップダウンリストから検索範囲(すべて、Windows, Unix)を選択します。

Step 5. 必要に応じて、期間セクションで期間(過去 X 日/週/月/年、または開始日と終了日)を指定します。

Step 6. **検索** をクリックします。
検索結果が表示されます。

Step 7. 必要に応じて、**使用ログインユーザー** ドロップダウンリストからログインユーザーを指定します。
検索結果が指定したログインユーザーでフィルタされます。

Step 8. 必要に応じて、**使用サーバー** ドロップダウンリストからサーバーを指定します。
検索結果が指定したサーバーでフィルタされます。

Step 9. アクティビティを再生したい場合は、 アイコンをクリックします。
ObserveIT スライドビューアーが起動し、アクティビティの再生が開始されます。

Step 10. セッション中のユーザーアクティビティの詳細を確認したい場合は、[+]ボタンをクリックします。

アイコンをクリックすると、特定のユーザーアクティビティを再生することができます。

4.4 記録済みセッション(アクティビティ)を再生する

記録済みセッションの再生には、スライドビューアー(Unix/Linux セッションの再生の場合は、コンソールエミュレータ)を使用します。ユーザーが 、 、または アイコンをクリックすると、別ブラウザウィンドウでスライドビューアー(またはコンソールエミュレータ)が開きます。スライドビューアー(またはコンソールエミュレータ)ではビデオと同じようなボタンを使って、停止、再開、早送り、巻き戻しを行えます。

ObserveIT を利用する大きな利点の1つは、記録済みセッションを特定の時点から再生できることです。この機能により、監査者や管理者はセッション全体を再生することなく特に興味のあるアクションが実行されたその時点に移動できるため、調査のための時間を節約することができます。

注記: 初期設定では、すべてのユーザーのすべてのアクティビティを記録するように設定されています。この設定は変更することができます。詳しくは『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』をご参照ください。

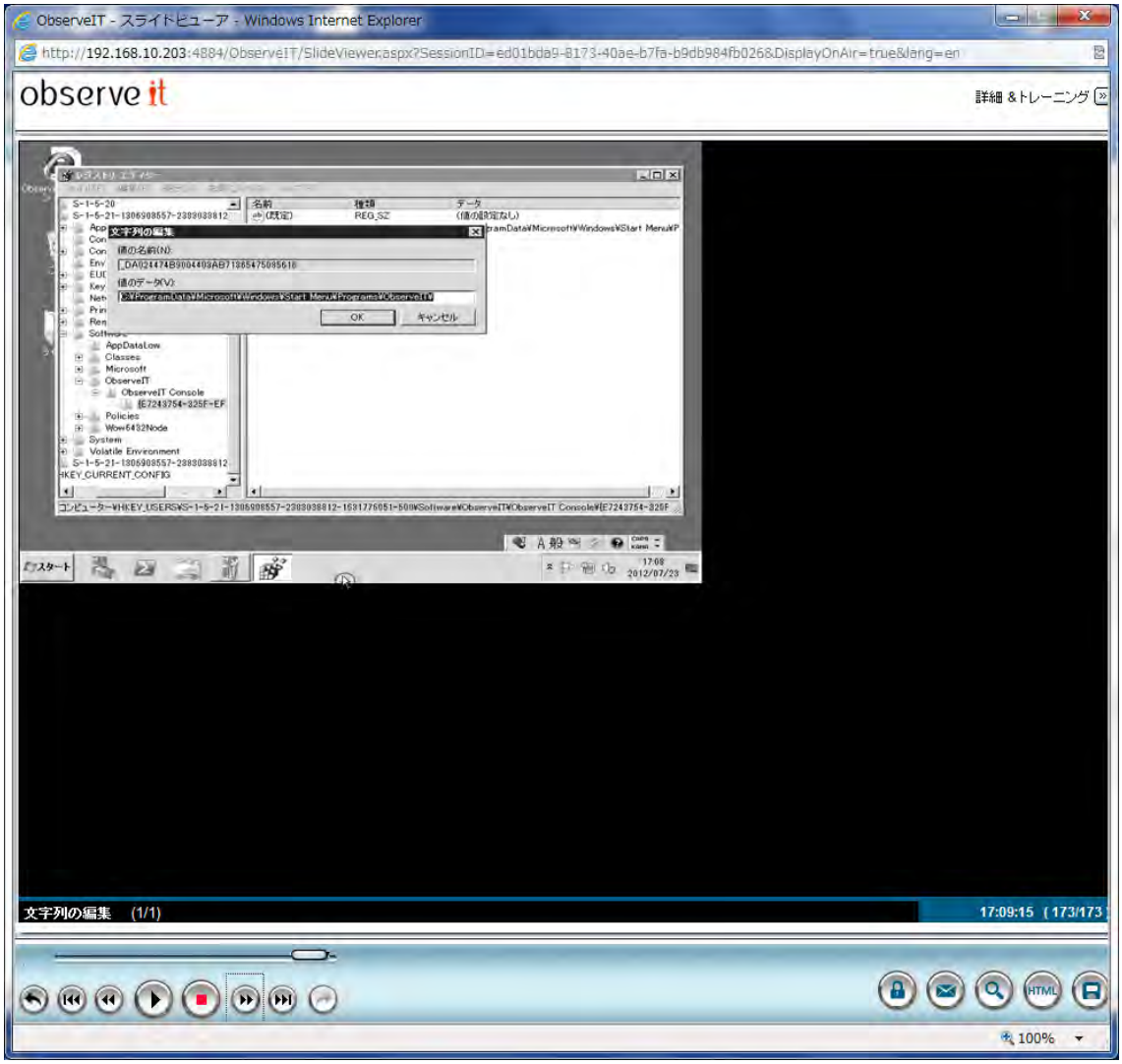
セッション（アクティビティ）の再生操作

- セッション全体を最初から最後まで再生したい場合は、該当セッションの アイコンをクリックします。記録済みセッションが最後に達すると、停止ボタンが押されない限り、最初から再生を繰り返します。

- 特定の時点からセッション（特定のアクティビティ）を再生したい場合は、該当アクションの アイコンをクリックします。

- 現在記録中のセッションをリアルタイム再生したい場合は、該当セッションの アイコンをクリックします。

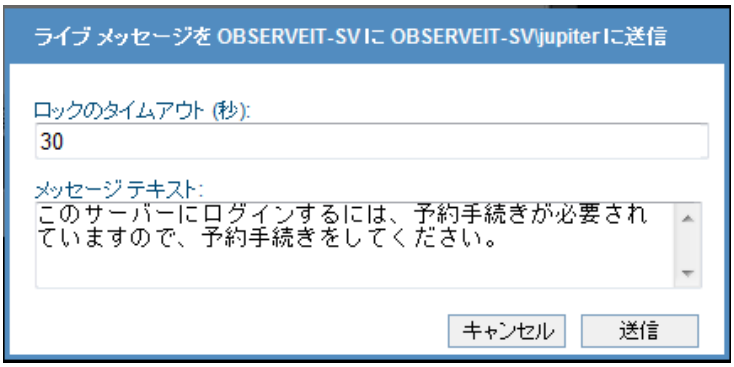
スライドビューアー（Windows セッション） 再生イメージ



ボタンの機能はビデオプレイヤーと同じように、停止、再開、早送り、巻き戻しが可能です。スライドビューアー画面左下のボタンは以下の通りです（左から右の順）。

	同じウィンドウ タイトルの前のインスタンスに移動
	前のウィンドウ タイトルに移動
	前のスライド
	再生/再生の再開
	中止
	次のスライド
	次のウィンドウ タイトルに移動
	同じウィンドウ タイトルの次のインスタンスに移動

スライドビューアー画面右下のボタンの機能は以下の通りです。

	新機能：アクティブセッションと対話、アクティブセッションのロック（ライブ セッションの記録中のみ利用可能） 
	新機能：ライブセッション中ユーザーへのメール送信 （ライブセッションの記録中のみ使用可能）
	このスクリーンショットをズーム
	現在のレコーディング全体または選択したスライドを THML ファイルにエクスポート
	レコーディングのオフラインコピーの作成。レコーディング全体または選択したスライドの保存

注記： 再生スピードは、1スライド 0.5 秒です。

4.5 レポートを使用する

ObserveIT にはいくつかの組み込みレポートが用意されています。このレポートを使用して、ObserveIT Web 管理コンソールからサーバーおよびユーザーアクティビティに関するサマリ情報を取得することができます。また、独自にカスタムレポートを生成したり、スケジュールを作成してレポートを管理者にEメール送信したりすることができます。ここでは、レポートの表示、カスタムレポートの作成、スケジュールの作成方法について紹介します。

4.5.1 レポートを表示する

ObserveIT をインストールすると、いくつかのレポートが作成されます。レポートは1アクションで簡単に表示できます。

レポートを表示する手順

Step 1. ObserveIT Web 管理コンソールにログインしていない場合は、ログインします。

Step 2. **レポート** タブをクリックします。

Step 3. 表示したいレポートの **実行日時** リンクをクリックします。

Step 4. 別ウィンドウが開き、レポート結果が表示されます。

observe it
Enterprise

レポート名: **サンプル: 管理関連タスク - 先週**

変換先: Excel

フィルタ条件:
セッション開始日時 過去 1 週 AND
ウィンドウタイトル 包含リスト **%Account%, %New Object%, %Deleting%, %Delete%, Local Area Connection%, Safely Remove Hardware, Command Prompt, cmd.exe, System Settings Change, Shut Down Windows, %GPO%, %Group Policy%, %Active Directory%, %Services%, %Administrators%, %Administrator%, %Select Groups%, %set%, %Add or remove programs%, Windows Components%, Run, Registry Editor, Edit%**

ログイン名	ドメイン名	UserName	サーバー名	アプリケーション名	ウィンドウタイトル	ウィンドウ タイトル ビデオ
jupiter	OBSERVEIT-SV	n/a	OBSERVEIT-SV	notepad	ObserveITAgent_SetupAction - メモ帳	
jupiter	OBSERVEIT-SV	n/a	OBSERVEIT-SV	notepad	ObserveITWebServices_SetupAction - メモ帳	
jupiter	OBSERVEIT-SV	n/a	OBSERVEIT-SV	notepad	ServerSettingsAgent - メモ帳	
jupiter	OBSERVEIT-SV	n/a	OBSERVEIT-SV	explorer	ObserveIT_Setup_v5.6.1.23_ja-JP	
jupiter	OBSERVEIT-SV	n/a	OBSERVEIT-SV	explorer	ObserveIT_Setup_v5.6.1.23_ja-JPのプロパティ	
jupiter	OBSERVEIT-SV	n/a	OBSERVEIT-SV	notepad	ObserveITClient_setup - メモ帳	
jupiter	OBSERVEIT-SV	n/a	OBSERVEIT-SV	notepad	ObserveITWebConsole_SetupAction - メモ帳	

合計: 7 個のレコード

Step 5. レポートに表示されたユーザーアクティビティを再生したい場合は、アイコンをクリックします。

スライドビューアーが起動し、ユーザーアクティビティの再生が開始します。

Step 6. レポートを Excel スプレッドシートにエクスポートしたい場合は、変換先:**Excel** リンクをクリックします。

ファイルをローカルに保存します。

ObserveIT 組み込みレポート

以下のサンプルレポートが提供されます。

レポート	概要
管理関連タスク – 先週	監視対象サーバーで実行された管理関連のタスク
サーバー名でグループ化されたアプリケーションの利用状況 – 先週	監視対象サーバーで使用されたすべてのアプリケーション。サーバー名でグループ化されます。
アプリケーション名でグループ化されたサーバーごとのアプリケーション利用状況 – 先週	監視対象サーバーで使用されたすべてのアプリケーション。アプリケーション名でグループ化されます。
リモート デスクトップ セッション – 先週	監視対象サーバーで開始されたすべてのリモート デスクトップ セッション。ウィンドウ タイトルおよびサーバー名でグループ化されます。
ログイン名でグループ化されたユーザー セッション – 先週	すべての監視対象サーバーにアクセスするすべてのユーザーセッション。ログイン名でグループ化されます。
サーバー名でグループ化された	すべての監視対象サーバーにアクセスするすべてのユーザ

ユーザー セッション – 先週	ー セッション。サーバー名でグループ化されます。
セッション日でグループ化されたユーザー セッション – 先週	すべての監視対象サーバーにアクセスするすべてのユーザー セッション。セッション日でグループ化されます。

以下のシステムレポートが提供されます。

レポート	概要
アクティビティ レポート	48 時間以内のすべての監視対象サーバーのすべてのユーザー セッションを一覧表示します。
日次アプリケーション レポート	すべての監視対象サーバーで 48 時間以内にアクセスされたすべてのアプリケーションを、アクセスしたユーザー名を含めて一覧表示します。
終了セッションのリスト	終了したセッションを一覧表示します。管理者へ通知します。

4.5.2 カスタムレポートを作成する

ObserveIT では、ユーザーが企業の要件に合うレポートを独自に作成することができます。カスタムレポートの内容は、ウィザード形式で定義していきます。それぞれの画面で必要な項目を設定していくだけで簡単にレポートを作成できます。また、一度作成したカスタムレポートや組み込みサンプルレポートは、編集、コピー、削除することができます。

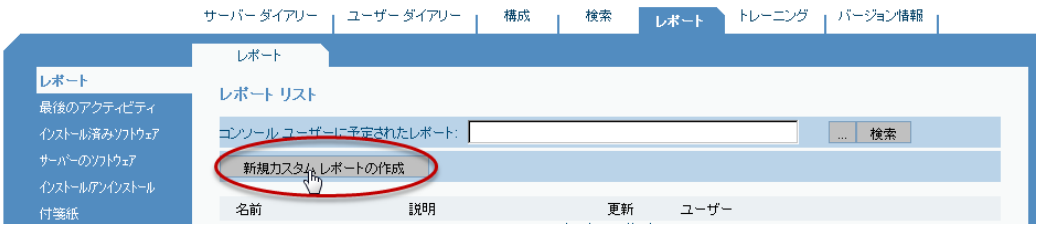
注記: システムレポートは削除できません。

カスタムレポートを表示する手順

Step 1. ObserveIT Web 管理コンソールにログインしていない場合は、ログインします。

Step 2. **レポート** タブをクリックします。

Step 3. **新規カスタムレポートの作成** をクリックします。

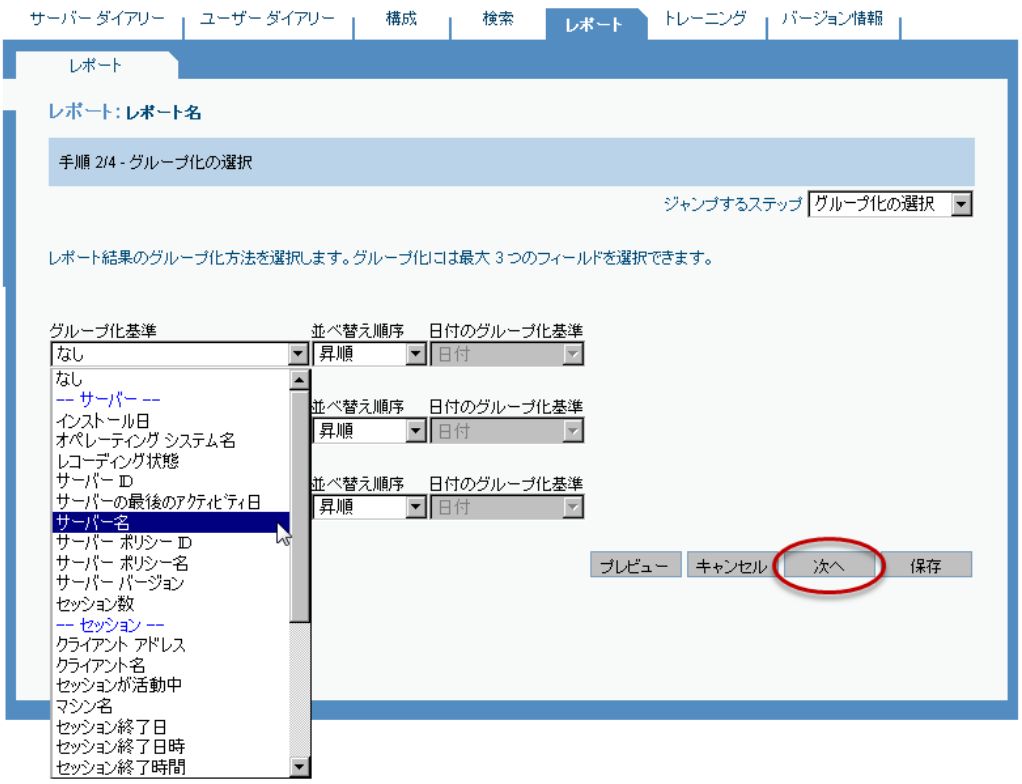


Step 4. 作成するレポートの種類を選択し、**次へ**をクリックします。

注記: 結果レポートはユーザーが選択したレポートの種類に基づいて配置されます。例えば、**サーバー** を選択した場合は、サーバーオブジェクト用のカラムがフォーカスされます。

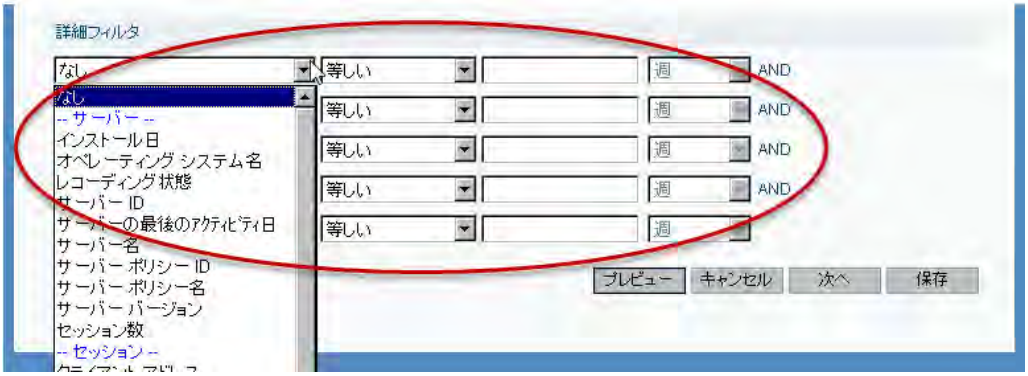
Step 5. 新しいレポートに表示したいカラムを選択し、**次へ**をクリックします。

Step 6. 必要に応じて、新しいレポートのグループ化と並べ替え順序を選択し、**次へ**をクリックします。



Step 7. レポートの開始日と終了日または過去の期間を指定します。

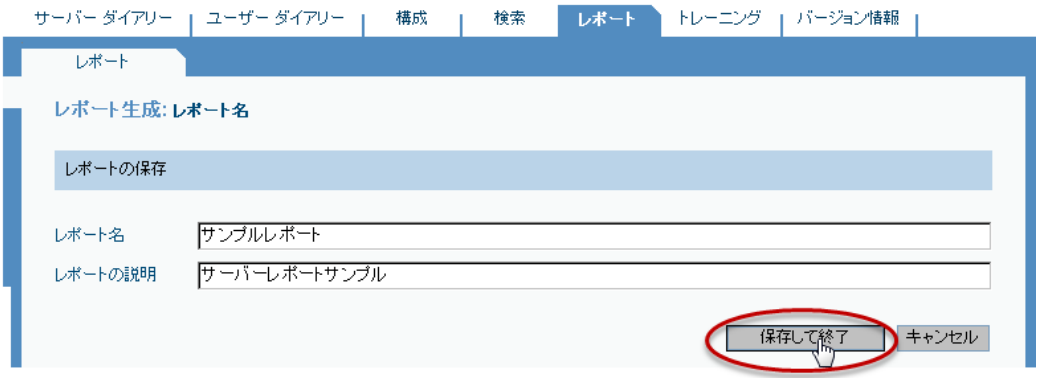
Step 8. 必要に応じて、等しい/等しくない、特定の文字列を含む/含まないなどの詳細フィルタを追加します。例えば、特定のキーワードを含む特定のユーザー名のみをレポートしたい場合に使用します。**次へ**をクリックします。



注記: "%" はワイルドカードです。"%" をフィルタキーワードの先頭に使用した場合、ユーザーが指定したテキスト文字より前は無視されます。"%" をフィルタキーワードの末尾に使用した場合、ユーザーが指定したテキスト文字の後は無視されます。

Step 9. 必要に応じて、レポート結果の列順を設定し、**保存** ボタンをクリックします。

Step 10. レポート名と(必要に応じて)レポートの説明を入力し、**保存して終了** をクリックします。



Step 11. レポート リストページに戻ります。新しく作成したレポートがリストに追加されます。

このレポートを実行、編集、コピー、削除することができます。レポートの実行手順については、『4.5.1レポートを表示する』をご参照ください。

4.5.3 レポートをスケジュール送信する

レポートは特定の間隔でスケジュール実行し、管理者またはセキュリティ監査者にEメール送信することができます。

注記: E メールレポートを構成するには、SMTP 設定および SMTP E メールアドレスを持つコンソールユーザーを構成する必要があります。

レポートをスケジュール送信する手順(事前準備その1: SMTP 設定)

Step 1. ObserveIT Web 管理コンソールにログインしていない場合は、ログインします。

Step 2. **構成** タブをクリックし、画面左のオプションメニューから **SMTP 設定**をクリックします。

Step 3. **SMTP サーバー**フィールドに SMTP サーバー名または IP アドレス、**ポート**フィールドにポート番号、**メール発信者**フィールドにメール発信者のアドレスを入力します。必要に応じて、**ユーザー名** および **パスワード** フィールドに SMTP サーバーでの認証に使用するユーザー名とパスワードを入力します。

Step 4. **更新** をクリックします。

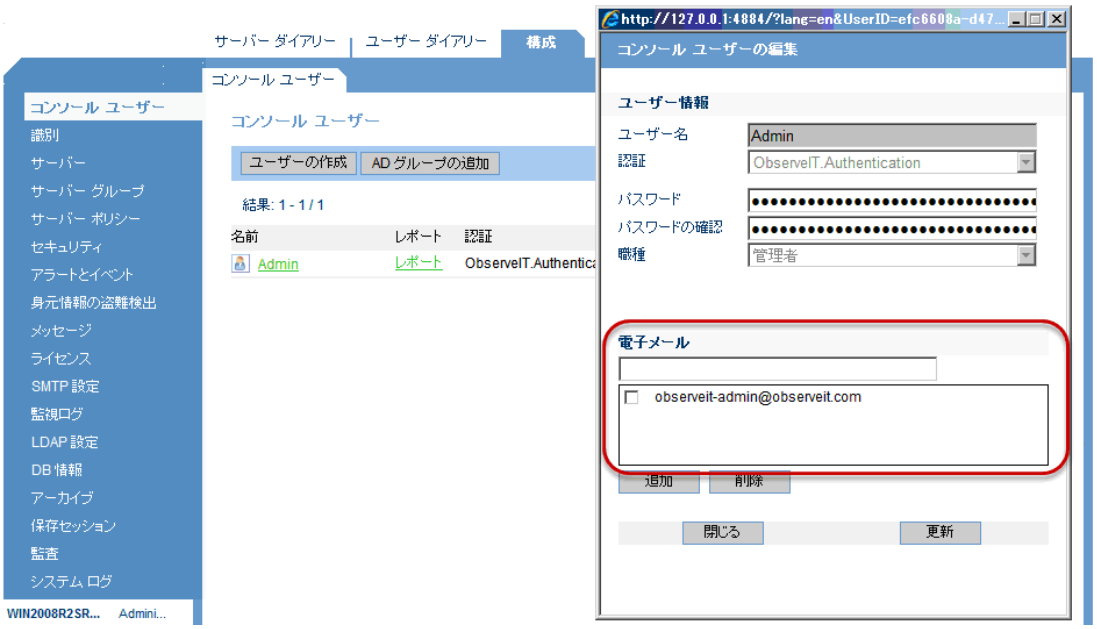
注記: 設定を確認したい場合は、**電子メールアドレス**フィールドに有効な E メールアドレスを入力し、**送信** をクリックします。しばらくすると指定した E メールアドレスにメールが届きます。

レポートをスケジュール送信する手順（事前準備その2：コンソールユーザーの構成）

Step 1. **構成** タブをクリックし、画面左のオプションメニューから**コンソール ユーザー**をクリックします。

Step 2. E メールアドレスを設定したいユーザー名のリンクをクリックします。

Step 3. コンソール ユーザーの編集画面の**電子メール**フィールドに、有効な E メールアドレスを入力し、**追加** をクリックします。



Step 4. **閉じる**をクリックします。

レポートをスケジュール送信する手順

Step 1. **レポート** タブをクリックします。

Step 2. レポート リストからスケジュール作成したいレポートの **スケジュール** リンクをクリックします。

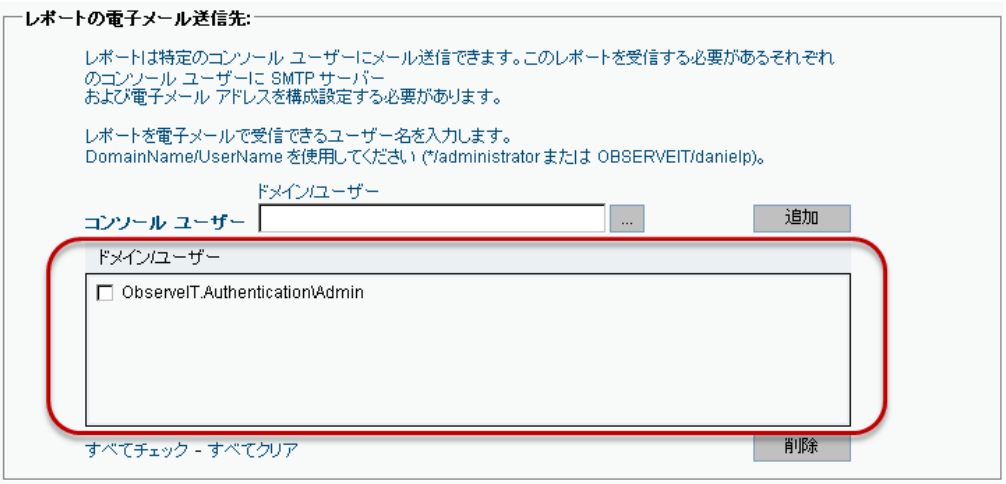
スケジュール レポートページが表示されます。

Step 3. レポート結果を E メール受信するコンソール ユーザーを追加します。

コンソール ユーザーを追加するには、 をクリックしコンソール ユーザーのリストから適切なユーザーを選択します。

Step 4. **追加** をクリックしてユーザーを追加します。

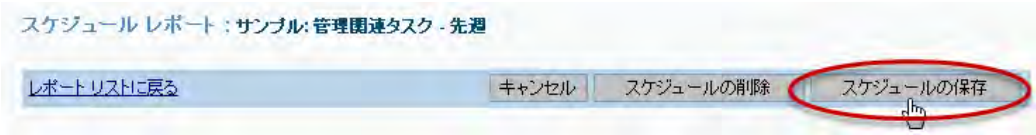
コンソール ユーザーがレポート結果を受信するユーザーのリストに追加されます。複数のコンソール ユーザーをこのリストに追加することができます。この場合各ユーザーがレポートのコピーを受信します。



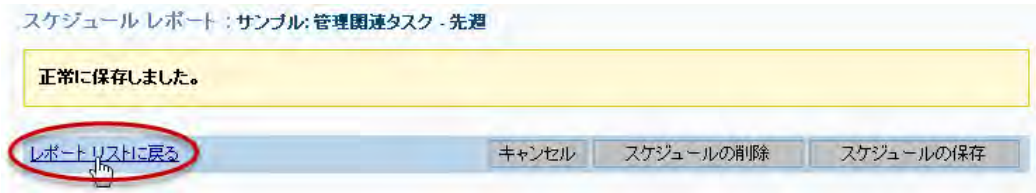
Step 5. レポートを実行するスケジュールを指定します。

レポートを実行するスケジュールを変更するには、**間隔** のラジオボタン（日毎、毎週、毎月）を選択します。スケジュールレポートの開始日と終了日を構成するには、適切な**開始日** と **終了日** を選択します。

Step 6. **スケジュールの保存** をクリックします。



Step 7. **レポートリストに戻る** リンクをクリックし、レポート リスト ページに戻ります。



Step 8. スケジュールアイコンがレポート名の横に表示されます。

注記: 初期設定では 15:00 にレポートが実行され、指定した E メールアドレスにレポートメールが送信されます。

5 ObserveITのその他の機能

ObserveIT にはこれまで紹介した機能以外にもさまざまな構成オプションがあります。ここでは、主な構成オプションの概要を紹介します。詳しくは『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』をご参照ください。

5.1 コンソールユーザー

コンソール ユーザーは、ObserveIT Web 管理コンソールにログインし記録済みセッションやその他の情報を閲覧したりロール(職種)に基づいて構成を変更したりすることができます。

初期設定のコンソールユーザーは、Adminです。このユーザーは、あらゆる構成タスクを設定できる最も大きな権限を持っています。

追加のコンソール ユーザーを簡単に作成することができます。コンソールユーザーには、ローカルコンソール ユーザー(ObserveIT データベース内に作成する)か、(LDAP ターゲットが確立済みであれば)Active Directory ベースのコンソール ユーザーかを作成できます。

詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『コンソールユーザー』をご参照ください。

5.2 識別

複数のユーザーがデフォルトアカウント(例: Administrator アカウント)でサーバーにアクセスする場合、このアカウントを使用している実際の人間を識別するのは難しく不可能ですらあります。ObserveIT の識別サービスを有効にすれば、監視対象サーバーにログインするユーザーに二次的な ObserveIT ログインプロンプトを表示し、ユーザーの識別を要求することができます。

例えば、ローカルサーバー（AD サーバーと区別する）管理者の甲と乙が共に Administrator のデフォルトアカウントでローカルサーバーをログインする場合、二人のログインを識別するため、**強制識別ユーザー作成**セクションで、Administrator を追加し、**ローカル ObserveIT 識別ユーザーの構成**セクションで、二人それぞれのユーザー名とパスワードの資格情報を追加すれば、後誰かが実際に Administrator としてログインしたかを明確に認識することができます。

詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『識別』をご参照ください。

5.3 サーバーポリシー

サーバー ポリシーとは、監視対象サーバーの構成を管理する構成オプションのセットのことです。サーバー ポリシーを使用することによって、管理者はより簡単に記録設定を行い、一度に多くの監視対象サーバーにその設定を適用することができます。

初期設定では、以下の4つのデフォルトポリシーテンプレートが存在します。

- デフォルトの Windows ベースのポリシー
- デフォルトのメタデータ限定ポリシー
- デフォルトの Unix ベースのポリシー
- デフォルトのレコーディング無効ポリシー

初期設定では、すべての Windows サーバー(またはエージェント)は自動的にデフォルトの Windows ベースのポリシーによって構成され、すべての Unix/Linux サーバー(またはエージェント)は自動的にデフォルトの Unix ベースのポリシーによって構成されます。これらのサーバーポリシーに加えた変更はすべてリンクされたマシンに影響を及ぼします。

必要に応じて、デフォルトのポリシーテンプレート定義を更新するか、新しいポリシーテンプレートを作成してサーバーまたはサーバーグループに関連づけることができます。

リストからサーバーポリシーテンプレートをクリックすると、構成プロパティページが表示されます。

レコーディングの有効/無効、トレイアイコンの表示/非表示などのシステムポリシーや、ユーザーまたはアプリケーションのレコーディングポリシーを定義することができます。

詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『サーバーポリシー』をご参照ください。

5.4 セキュリティ実装

ObserveIT v5.6 では、セッションデータの完全性保護機能が新たに追加されました。下の画面に示されるように、「セッションデータの完全性を有効にする」機能がデフォルト設定されます。セッションデータが改ざんされた場合にサーバー/ユーザー ダイアリーの「スライド」番号の横に、「⚠」のような警告アイコンが表示されます。

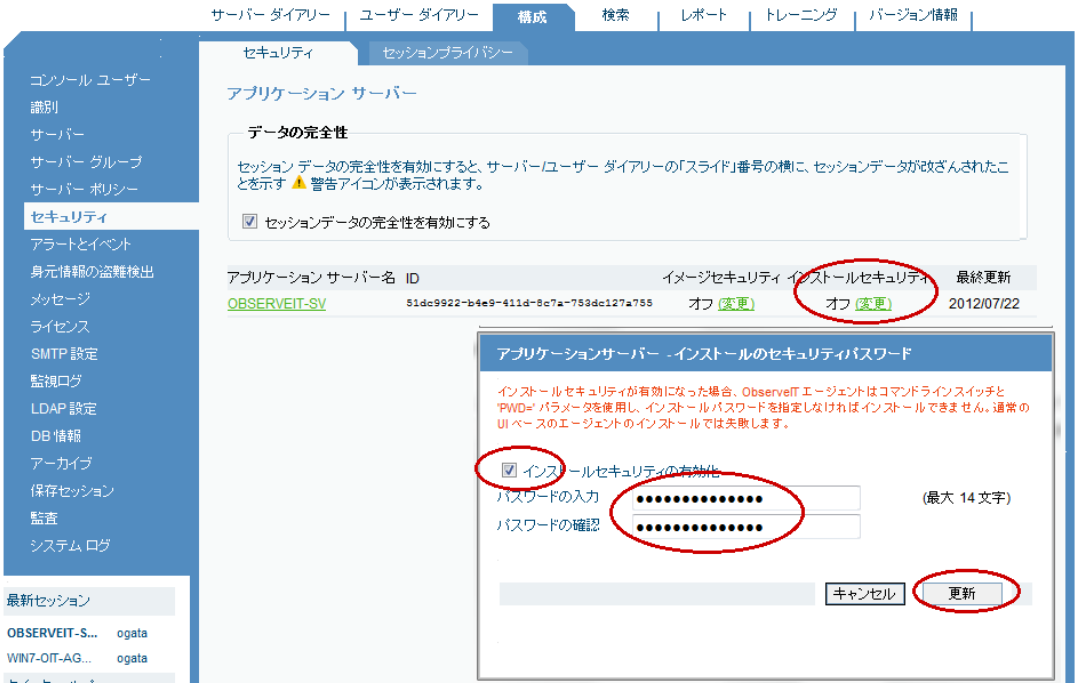
ObserveIT は、デジタル署名や暗号化のようなセキュリティ機能を構成することもできます。セキュリティページでは、記録データの暗号化やインストールセキュリティ、セッション再生のプライバシー保護を構成できます。

5.4.1 イメージセキュリティの有効化

イメージセキュリティが有効である場合、ObserveIT アプリケーションサーバーは、PKI ベースのメカニズムを使用してすべてのセッションデータを暗号化しデジタル署名します。

5.4.2 インストールセキュリティの有効化

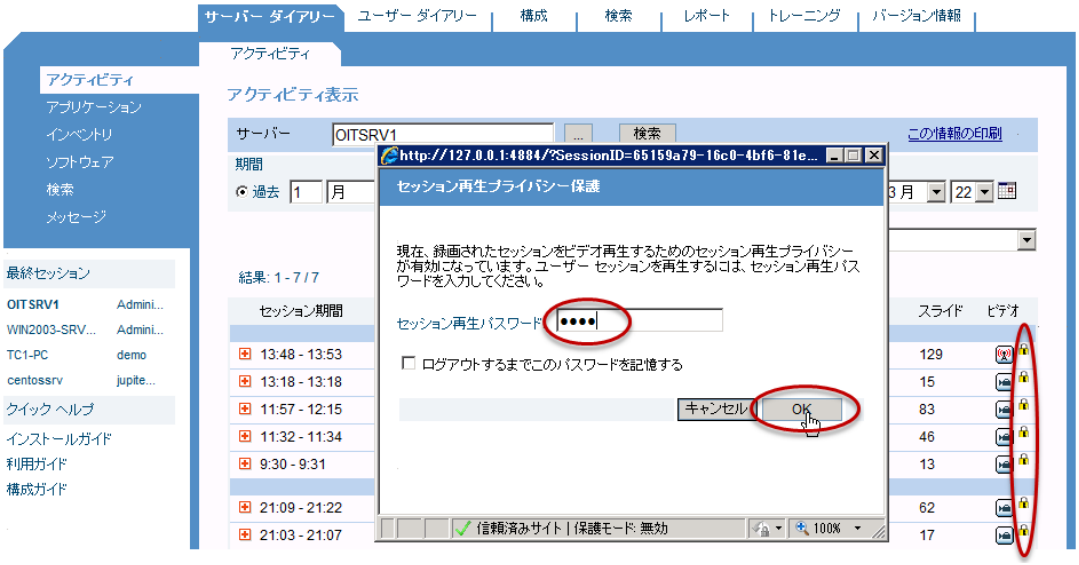
顧客の中には ObserveIT エージェントソフトウェアを無許可でインストールすることを防ぐため、インストールセキュリティ機能を有効化にすると。インストレーションパスワードを知っているユーザーのみがエージェントをインストールすることができます。



5.4.3 セッション再生プライバシーの有効化

ObserveIT は、コンソールユーザーに適切なロール（職種）と権限を与え、ユーザーが権限を持つあらゆるセッションを再生できるように設計されています。しかし、顧客の中には記録済みセッションのプライバシーを保護するために、再生セキュリティ対策を追加したいと考える人もいらっしゃるかもしれません。

セッション生成プライバシーを有効化すると、再生ボタンの横にロックアイコンが表示されます。コンソールユーザーが再生ボタンをクリックすると、再生プライバシー保護パスワードの入力を促すプロンプトが表示されます。



5.4.4 トラフィックセキュリティの有効化

ObserveIT エージェントとアプリケーションサーバーは、セッションハイジャックや再生を防ぎデータ通信を暗号化するためにトークン交換を使用します。この通信のセキュリティ対策は以下を含みます。
通信のセキュリティ対策：

- 暗号化（Rijndael）
- デジタル署名
- トークン交換

また、アプリケーション サーバー上の IIS で SSL を要求するように構成し、エージェントが HTTP ではなく HTTPS を使用するように構成することで通信をより安全にすることができます
詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『セキュリティ実装』をご参照ください。

5.5 アラートとイベント

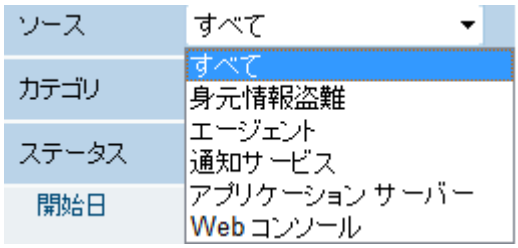
ObserveIT v5.6 はアラートとイベントのマネジメント機能を追加することにより、システムのライブモニタリングに対して、潜在的な問題が発生する前に、IT管理者が積極的に対処できるように役立ちます。この機能は以下のタグページにより構成されています。

- アラートの検索、確認と処理する方法
- イベントの検索、確認と処理する方法
- アラートが E メール通知とリンクする方法

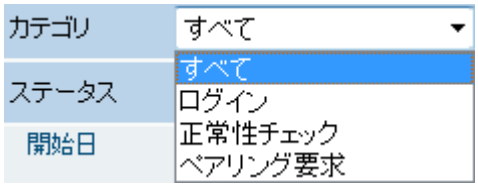
5.5.1 アラート管理

アラートはイベントと関連し、その重要度、発生元、及びカテゴリによって定義されています。

- 重要度は高と中に分類されています。
- アラームは下の図に示す発生元（ソース）からトリガされます。



- カテゴリは下の図に示す発生元（ソース）に応じて定義されています。



アラートを検索するには、フィルタの横にある[ ] をクリックし検索フィールドを展開します。

5.5.2 イベント管理

イベントは、発生元、カテゴリ、重要度に応じて定義されます。
イベントを検索するには、フィルタの横にある[ ] をクリックし検索フィールドを展開します。

5.5.3 アラーム設定の構成

トリガされたアラートに関する E メール通知を受信するには、このタグページで行います。詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『身元情報の盗難検知』をご参照ください。

5.6 身元情報の盗難検知(なりすまし犯罪の発見)

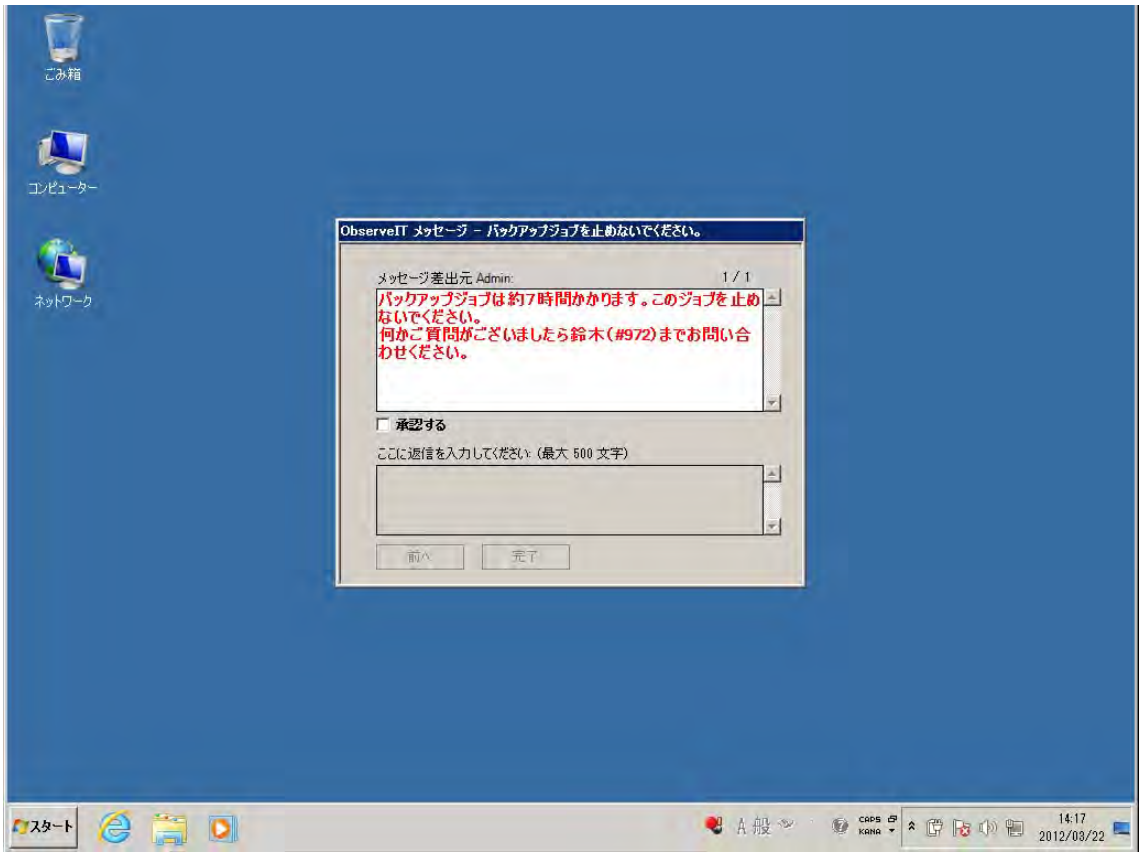
ObserveIT v5.6 は、身元情報の盗難検知、即ちなりすまし犯罪の発見プログラムが追加され、システム認証 ID の管理機能が強化されました。このソリューションは、許可されていないクライアントコンピューターから ObserveIT で監視しているサーバーへアクセスすると、これを検知、さらに拒否できるように設計されています。その機能を実現するため、「ペアリンク」が導入されています。

- 保護対象指定:管理対象サーバーの登録
- ペアリンク・リクエスト:対象サーバーへのログイン予約、申請と有効期間の管理
- ペアリンク:ログインするドメイン名、ログイン名、ログインするクライアントマシン情報の登録
- ペアリンクを E-mail とリンクさせる
- リクエストへの承認と却下
- リクエストと通知する E-mail のテンプレート機能
- 予約外ログインの承認と拒否

詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『身元情報の盗難検知』をご参照ください。

5.7 メッセージ

ObserveIT は、ユーザーが監視対象サーバーにログオンする時にメッセージを表示することができます。



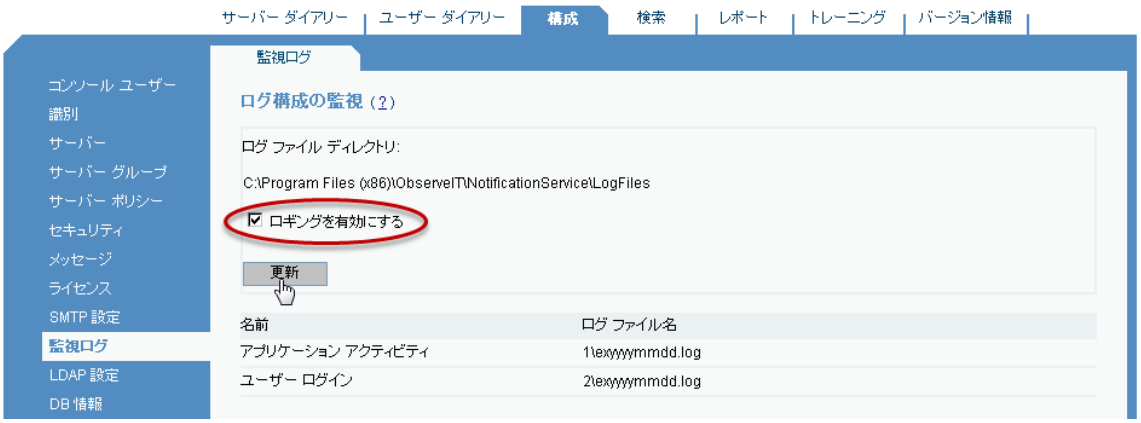
ユーザーは表示されたメッセージの承認を要求されます。ここで行った承認は ObserveIT コンソールに記録されます。これにより、ユーザーが特定業務について警告を確かに受けとっており、メッセージを理解し受理したことを証明できます。

ObserveIT Web 管理コンソールから、メッセージが誰にいつ承認されたか、またユーザーが記入したコメントを確認することができます。

詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『メッセージ』をご参照ください。

5.8 監視ログ

ObserveIT は監視対象サーバー上で起こったすべてのアクティビティを2つのテキスト形式のログファイルに記録します。これらのログファイルには、時間、日にち、サーバー名、ユーザーセッション、ユーザー名、アプリケーションウィンドウタイトル、実行ファイル名など重要なメタデータ情報が含まれます。



アプリケーションアクティビティログファイル:

FirstScreenshotTime（初回スクリーンショット時間）, SessionId（セッション ID）, ServerName（サーバー名）, DomainName（ドメイン名）, LoginName（ログイン名）, UserName（ユーザー名）, ApplicationName（アプリケーション名）, WindowTitle（ウィンドウタイトル）

ユーザーアクティビティログファイル:

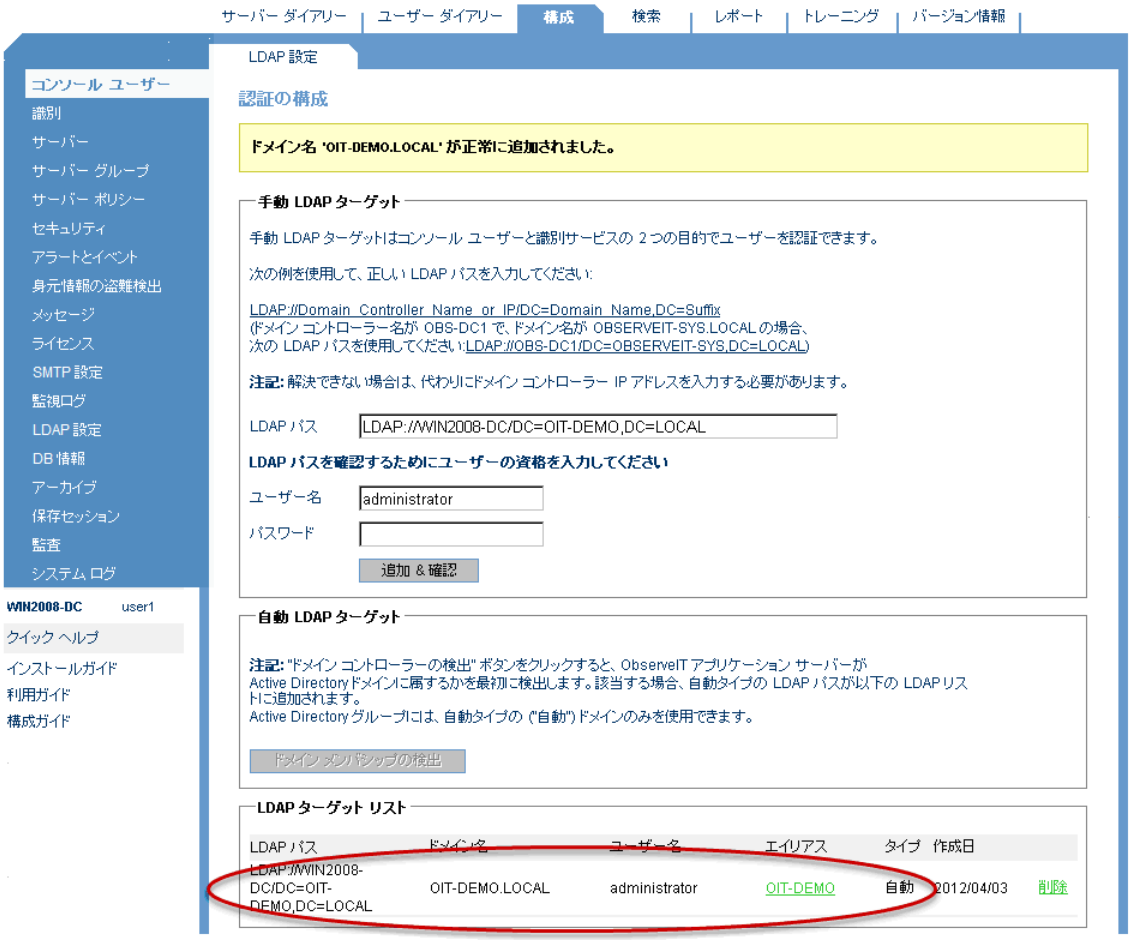
CreatedDate（作成日）, SessionId（セッション ID）, MachineName（マシン名）, DomainName（ドメイン名）, LoginName（ログイン名）

3rd パーティ製の監視および管理ツールと連携すれば、これらのログファイルを解析してイベントを作成したり、ログファイル内に含まれるテキスト文字列をもとにアラートを発報したりすることが可能になります。

詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『ログファイルの監査』をご参照ください。

5.9 LDAP設定

ObserveIT は Microsoft Active Directory ドメインコントローラーのような外部の LDAP サーバーと接続することができます。Active Directory ユーザーや（場合によっては）グループアカウントを使用して ObserveIT Web 管理コンソールへのアクセスを許可したり、ObserveIT 識別サービスで必要な資格情報を提供したりすることができます。



詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『LADP 設定』をご参照ください。

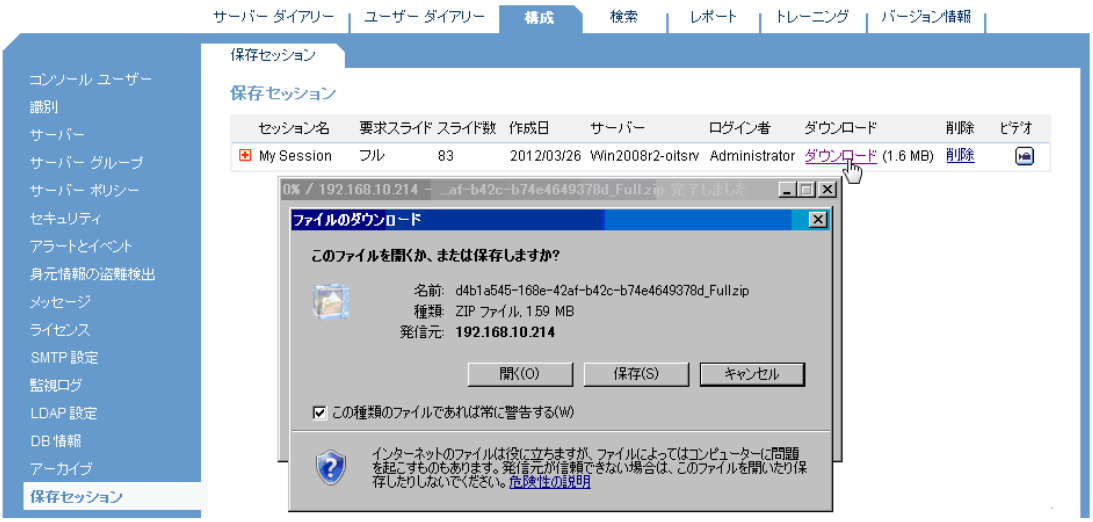
5.10 アーカイブ

ObserveIT は、すべての設定データと ObserveIT エージェントがキャプチャしたすべてのメタデータをデータベースに保存します。アーカイブ機能を使用すれば、データベースから古いセッションデータをアーカイブまたは削除できます。

詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『データベースの管理』をご参照ください。

5.11 保存セッション

セッションはオフラインで閲覧するために保存することができます。これは、トレーニングや情報共有、録画データを閲覧したい人がアクセス権を持たない場合や使用権限を持たない場合に役立ちます。



詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『保存セッション』をご参照ください。

5.12 ObserveIT Web管理コンソールへのアクセス監査

ObserveIT には内部の監査システムがあり、ユーザーがビデオにアクセスするたびにユーザー、IP、閲覧されたキャプチャセッション、フレームを記録します。これにより ObserveIT Web 管理コンソールにアクセスした管理者を監査でき、監査者を監査する外部の監査メカニズムを設計する必要がなくなります。

5.12.1 ログイン監査

ログインタブでは、では、ユーザーログインごとに以下の情報を確認できます。

- ログインが成功したか失敗したかの識別。失敗した場合はその理由(バルーン)。
- ユーザーログインの日時
- Web 管理コンソールにアクセスしたコンソールユーザー
- (コンソールユーザーが外部の Active Directory または LDAP ドメインで構成されている場合)ドメイン名

- Web 管理コンソールにログインするために使用された IP アドレス。

5.12.2 セッション監査

セッションタブでは、コンソール ユーザーが再生したすべてのセッション、日時情報、Web 管理コンソールにログインするために使用された IP アドレスが表示されます。

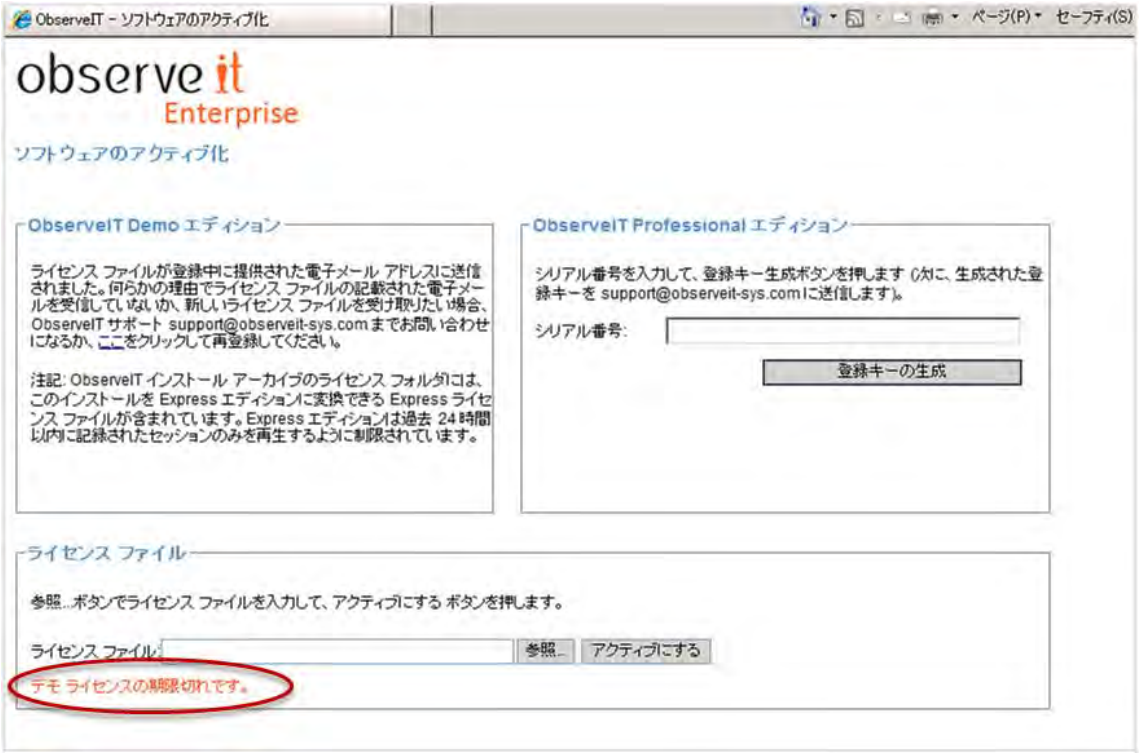
5.12.3 保存セッション監査

保存セッションタブでは、コンソール ユーザーがダウンロードしたすべての保存セッション、要求スライド、アクション日時情報、アクションタイプなどが表示されます。

詳しい内容については、『ObserveIT 製品マニュアル』の『構成ガイド』>『Web 管理コンソールへのアクセス監査』をご参照ください。

6 ObserveITのアンインストール

ObserveIT の評価期間が終了すると、ObserveIT Web 管理コンソールにログインできなくなります（ソフトウェアのアクティブ化画面が表示され、ライセンスファイルセクションに“**デモライセンスの期限切れです**”というメッセージが表示されます）。



評価終了後に正規ライセンスを適用し製品版に切り替えることができますが、ここでは ObserveIT のアンインストール手順について説明します。

以下の内容を含みます。

- ObserveIT Webコンポーネントのアンインストール
- ObserveITデータベースの削除
- ObserveITエージェントのアンインストール

6.1 ObserveIT Webコンポーネントのアンインストール

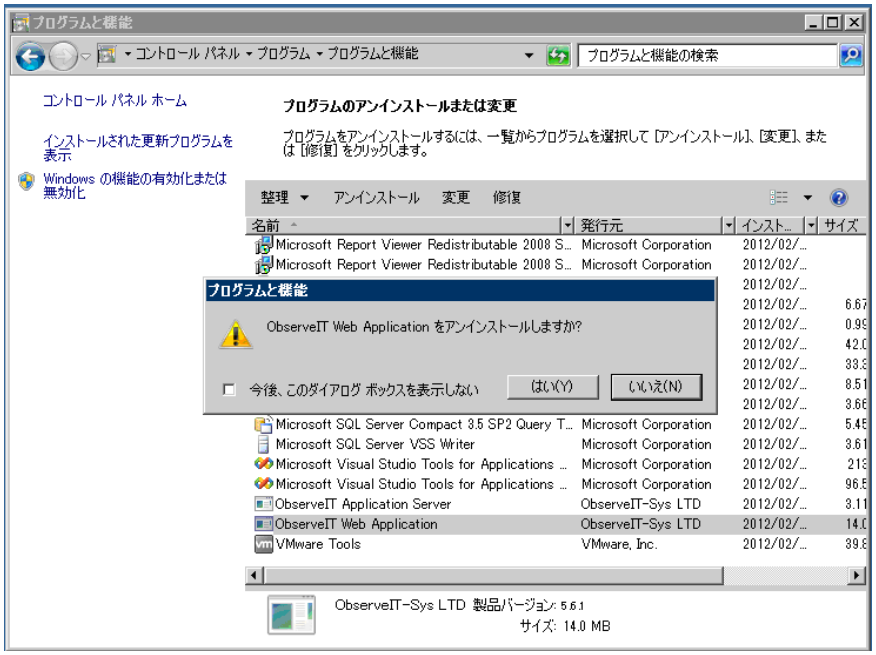
ObserveIT Web コンポーネント（Web 管理コンソールおよびアプリケーションサーバー）は、**コントロールパネル** > **プログラム** > **プログラムと機能** からアンインストールできます。

ObserveIT Web コンポーネントのアンインストール手順

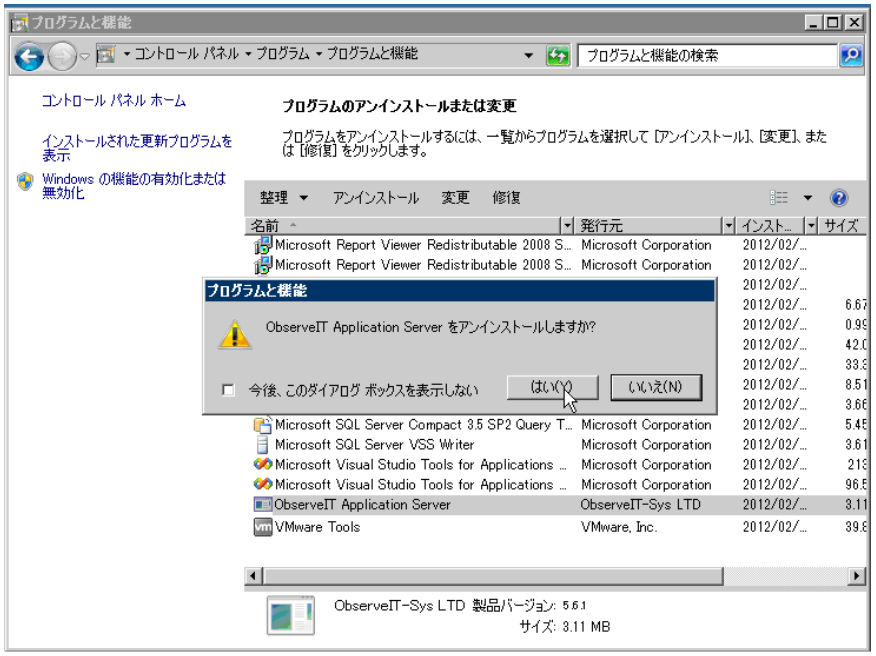
Step 1. ObserveIT Web 管理コンソールをインストールしたマシンに管理者権限を持つアカウントでログインします。

Step 2. **スタート** > **コントロールパネル** > **プログラム** > **プログラムと機能** を選択します。

Step 3. インストール済みのリストから **ObserveIT Web Application** を選択して **アンインストール** ボタンをクリックし、**はい** をクリックします。



Step 4. インストール済みのリストから **ObserveIT Application Server** を選択して **アンインストール** ボタンをクリックし、**はい** をクリックします。



Step 5. ObserveIT インストールフォルダは自動で削除されません。必要に応じて ObserveIT フォルダを削除します（デフォルトインストールの場合：C:¥Program Files¥ObserveIT）。

6.2 ObserveITデータベースの削除

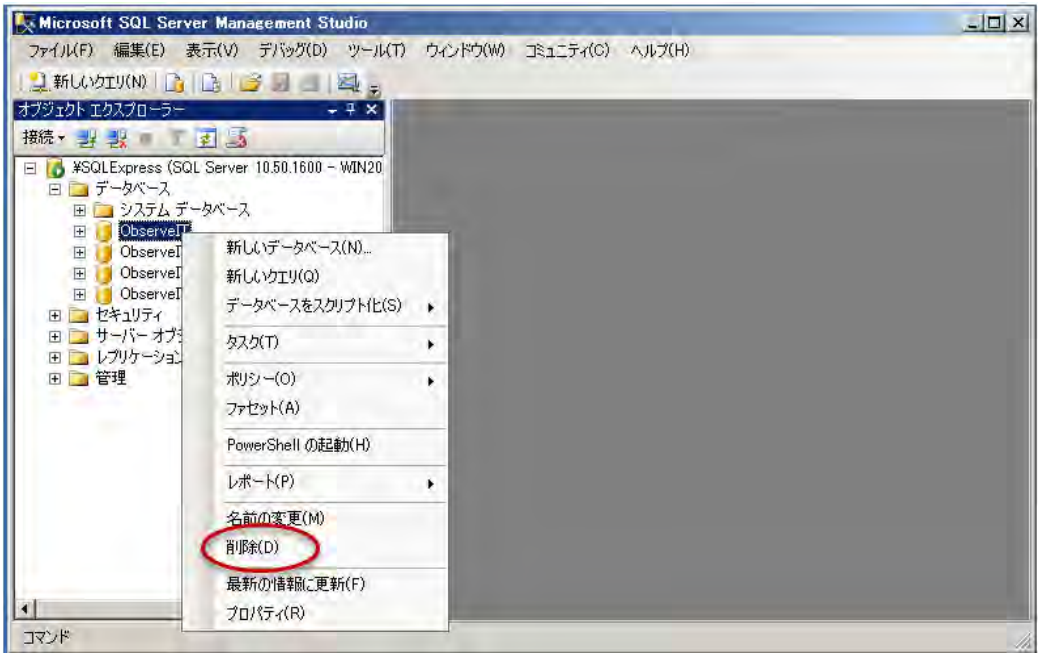
ObserveIT はデータを SQL Server に保存します。すべての ObserveIT Web コンポーネントとエージェントを削除しても、データベースはまだ SQL Server に残っています。このため、評価で使用したデータを削除したい場合は、SQL Server から手動でデータベースを削除する必要があります。

ObserveIT データベースの削除手順

Step 1. （ご利用中の SQL Server バージョンに基づき）SQL Management Studio または SQL Query Analyzer を開きます。

Step 2. データベースを展開し、ObserveIT データベースを選択します。

Step 3. 右クリックメニューから **削除** を選択します。



Step 4. オブジェクトの削除画面で **OK** をクリックします。

Step 5. Step 2 からStep 4の手順を以下のデータベースに対して繰り返します。

ObserveIT_Data, ObserveIT_Archive_1, ObserveIT_Archive_Template

注記：アーカイブ用のデータベースを独自に追加した場合は、そのデータベースも削除してください。

6.3 ObserveITエージェントのアンインストール

ここでは、ObserveIT エージェントのアンインストール手順について説明します。

以下の内容を含みます。

- Windows エージェントのアンインストール

6.3.1 Windowsエージェントのアンインストール

ObserveIT Windows エージェントは、**コントロールパネル** > **プログラム** > **プログラムと機能** からアンインストールできます。

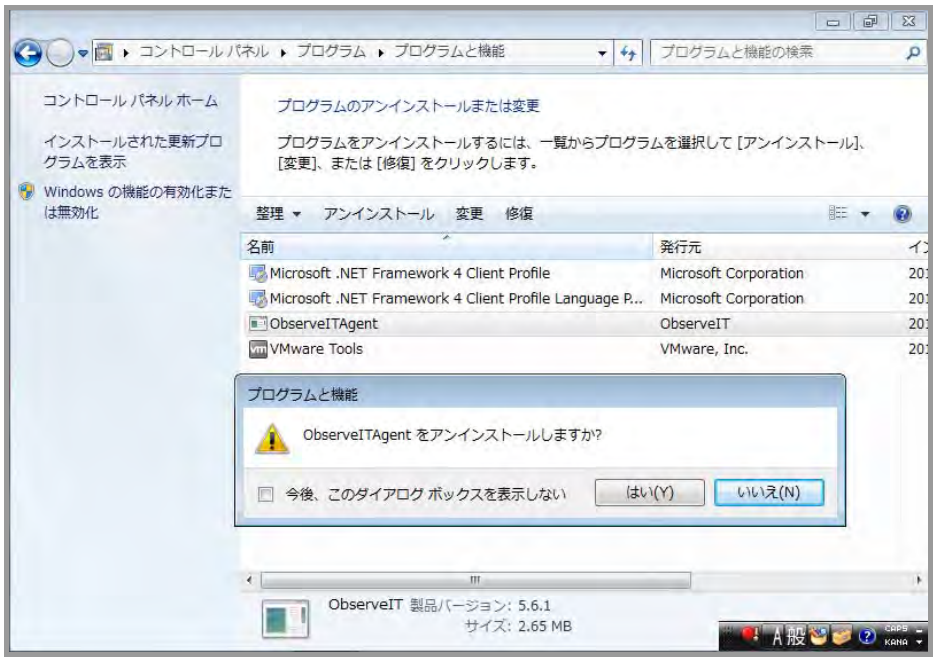
注記: スクリプトを使用して Windows エージェントをアンインストールすることもできます。詳細については、『製品ガイド』の『インストレーションガイド』をご参照ください。

Windows エージェントのアンインストール手順

Step 1. ObserveIT Windows エージェントをアンインストールしたいマシンに管理者権限を持つアカウントでログインします。

Step 2. **コントロールパネル** > **プログラム** > **プログラムと機能** を選択します。

Step 3. インストール済みのリストから **ObserveITAgent** を選択して、**アンインストール** ボタンをクリックし、**はい** をクリックします。



Step 4. ObserveIT インストールフォルダは自動で削除されません。必要に応じて ObserveIT フォルダを削除します（デフォルトインストールの場合：C:¥Program Files¥ObserveIT¥ObserveITAgent）。

7 お問い合わせ

弊社では、ObserveIT に関するご意見、フィードバックをお待ちしております。

ジュピターテクノロジー株式会社（Jupiter Technology Corp.）

住所: 〒183-0023 東京都府中市宮町 2-15-13 第 15 三ツ木ビル 8F
URL: http://www.jtc-i.co.jp/
電話番号: 042-358-1250
Eメールアドレス: info@jtc-i.co.jp

本文書に関する諸権利は、特に記載されているもの以外は、すべてジュピターテクノロジー株式会社に帰属しており、著作権法上認められた場合を除き、無断使用・無断転載を禁止します